



新宿発
324号

政権交代、そして今。

「安保」より「友好同盟を」

青木 みか

鳩山政権に思いをよせていた“あの時”から
参議院選挙の前に思うこと

戸田 順子

木瀬 慶子

「普天間」攻防—— そしてこれから

芦澤 礼子

〈失望した大衆〉の一人として

中川 清子

訪 問 「命を大切にする新しい政治」に
力を注ぐ福島みずほさんを訪ねて

詩 二〇〇九年八月三〇日

堀場 清子

ちょっと
ひと息 「仏陀」

桑原 ちるこ

提 案 夫婦げんかの対策 私案

土屋 隆司

沖縄から 地元合意のない日米合意は
決して実現しない

浦島 悦子

新潟から 中越沖地震 あれから3年

押見 操子

母を語る リブを生きた明治の女書生

斎藤 千代



324号 政權交代、そして今。

目次

巻頭言 あふれる思いを言葉に！行動に！	1
政權交代、そして今。	
「安保」より「友好同盟を」	青木 2
何が「本もの」なのか鳩山政權に思いをよせていたあの時のことから	戸田 10
参議院選挙の前に思うこと	木瀬 19
「普天間」攻防——連立政權成立から崩壊、そしてこれから	芦澤 21
〈失望した大衆〉の一人として	中川 34
あごろメイト訪問	
「命を大切にする新しい政治」に力を注ぐ福島みずほさん	きき手 斎藤 38
詩 二〇〇九年八月三〇日	堀場 56
ちよつとひと息 ★翻訳★「仏陀」	くわはら 60
提案 夫婦げんかの対策（私案）	土屋 70
沖縄から 地元合意のない日米合意は決して実現しない	浦島 76
新潟から 中越沖地震 あれから三年	押見 78
〈連載〉母を語る 7 リブを生きた明治の女書生 4	斎藤 85
TOPICS	90
あじろのあじろ	96

あふれる思いを 言葉に! 行動に!

二〇〇九年八月三〇日。総選挙開票速報を、徹夜で見まもった人は、少なくなかったと思います。「この日本を変えられるだろうか」と思いながら、「なんとしても変えなくては……」の願いに支えられて投じた一票。

テレビの画像に写し出されたのは、革新派の、予想もしていなかった伸び方でした。日本人は愚かか……と、半ばあきらめていたけれど、「あの戦争」に傾斜した「昭和の日本人」とは、違っていました。

「日本の生まれ変わり」を願っていた人の、一票、一票は、「自民党ではない、新しい政府を!」と、自分の気持ちを率直に、表現したのです。

開票が進めば進むほど、その〈夢〉は〈現実〉に変わりました。あの深夜、友人・知人に電話して、興奮を共有した方も、少なくなかったと思います。

あれから八か月。私たちは、あの時の〈夢〉を、ゆるぎない現実に変えたでしょうか。変革の旗手と思われた鳩山氏は、意外に脆弱でした。

去年、希望を託した政権下での、最初の選挙が近づきました。この〈今〉に不満があるとしたら、それは、〈私〉自身の行動の結果です。民衆の希望する方向とは違うと思ったら、それを言動に現してこそ、望ましい変革が現実のものになる。

日本を〈美しい国、心やさしい国にする人〉を、一人ひとりの〈わたし〉が選ぶ選挙。「次号の『あごら』では、喜びを共有できる」と確信しつつ、この号をお届けします。

政權交代、そして今。

「安保」より「友好同盟を」

青木 みか

一九二三年生まれの私は、二十歳の時、夫が戦死した。学徒出身、科学者としての彼の夢は二七歳で消滅した。また弟は、広島で原爆に被災した。これらの体験から、私には戦争の残酷さと思かさが、心に焼き付いている。

当時から六十余年経過したが、戦争回避の思いは一刻も忘れがたい。「安保」にも一抹のキナ臭さを覚える私は、「友好同盟」への変換を望んでやまない。

省みれば十五年戦争勃発の頃、私は青春まった中の女学生であった。当時、新年の書き初めに、「み戦は酷寒の野をおおいゆく」と、人びとに膾炙されていた長

谷川素逝の句を大書し、軸にして掲げた。「御戦」とは「陛下に仕える皇軍による聖戦である」と教えられていた。満州（中国北東部）の雪の眩野を進軍する同胞に敬意を表し、勇気を讃えながら、何度も、筆を走らせた。

一九三〇年代、一部の政治家と軍人によって始められた侵略戦争は、「治安維持法」のため、国民に真相が伝達されなかった。後に「天下の悪法」と称されたこの法律は、言論・集会・出版・思想・宗教などなど、すべての自由を禁止したため、国民は体制順応の姿勢をとらざるを得なかった。

真実を述べ、時勢に抵抗した勇敢な知識人は投獄され、拷問の末、獄死する人もあった。

夫は「長いものには巻かれて生き延びるより仕方のない世相だ」と諦めていたが、このように従順で無能な一庶民さえ、国家権力は蹂躪してしまった。

一九四五年、敗戦によって、はじめて国の横暴な侵略戦争の真意を感知した私は、指導者に翻弄された無智な自己を反省するとともに、「二度と騙されないゾ」と心に誓った。

定年退職後、余暇を得た私は、「お国のため」という言葉に惑わされて、自己を捨て、苦悩に耐え忍んだ知人の手記を編集して、『どうして戦争を始めたの？ ノーと言えなかった狂乱の時代』のタイトルで二〇〇二年に出版した（風媒社）。

安保の成立

旧安保条約は、一九五一年、「占領を合法化する条約」として結ばれた。その後、一九六〇年に、米国の日本防衛義務を付け加えることなどの修正を経て、新条約が締結された。

すなわち「日本が米国に守ってもらう代わりに、米国に日本国内の基地を提供する」という内容のものが、一月十九日、岸信介首相とアイゼンハワー大統領によって調印された。

それに反対した、当時の「六〇年安保闘争」の若人の行動は忘れられない。戦後十五年経過し、世界は米ソ両国間の冷戦の真っ最中。日本人の多くは過去の大戦を追想し、米国との軍事同盟に反駁した。全学連の学生たちは国会に突入し、防衛する警官隊と衝突した。東大生・樺美智子さんが犠牲になったが、私は哀悼しながら若人の純粋なパワーと強い正義感にエールをおくった。

当時の世論調査（朝日新聞）では、「安保改正で日本が戦争に巻き込まれるおそれ強い」との回答は、三八%。「日本の安全を守る方法として中立国を望む」という人、三五%、計七三%の人が、安保より「平和国家としての中立」を希望していた。

岸政権の強行採決で安保が成立してから、同盟受容の五十年の歳月が流れ、米ソ間の冷戦も消失した。しかし最近の世論は、七割以上が「日米安保は今後とも維持するのが望ましい」という。半世紀前、命を賭して戦った若人の善意は葬られた思いである。

日本が基地を提供し、自衛隊と米軍が日本の防衛にあたる。「在日米軍は、アジア太平洋地域の安全に寄与する」というのが安保の骨子であるが、今日、この主旨は、一般国民に空気のような存在となって受容されているようである。

しかし私には、霽のようで、心が晴れない。薄氷の上を歩いている現状に危機感を抱きながら、『危い！戦争がつけられる』というタイトルで、二〇〇六年、拙著を出版（風媒社）した。

安保と「九条」の狭間で

安保は空気と化し、戦争のことは忘れられた現在、沖縄基地移転の件だけが、今国会（二〇一〇年一月）でも話題となっている。

戦争の残酷さが風化しつつある今日、戦中派の私は、その真実を充分に語り継いでいないことに責任を感じる。

国内における〈九条の会〉は、今日、七五〇〇近く結成されているが、改憲派の輪も広がっている。例えば昨年八月の東大と朝日新聞によるアンケートに基づくと、民主党議員のうち改憲派四六％、護憲派二二％、どちらともいえないが三一％とあり、改憲派と無関心派が七七％を占めている、一般国民を対象とした調査では、護憲派が改憲派を僅かに越えるが、無関心派が圧倒的に多い。この実態をみると、戦争の惨酷さや九条の意義が、一般に認知されていないことを知る。

一般市民が犠牲となった原爆被災や沖縄地上戦、数百万人が無一物となって焼け出された都市空爆をはじめ、二三〇万人に及ぶ同胞の戦死者、二〇〇〇万人を越える近隣諸国の被災者。

さらにシベリヤ抑留者の過酷な捕虜生活や、中国における日本軍の暴挙、南太平洋の孤島で飢えと熱帯病のため命果てた兵士たちの遺骨の收拾は、まだ完了していない。これらの体験者は、「戦争のことなんか思い出すのも嫌だ」と言つて口を噤む。そのため莫大な犠牲は忘れられ、無駄に葬られる。六十余年間、戦争に参加することなく、朝鮮戦争、ベトナム戦争はじめ、イラク・アフガンなどで、一滴の血を流すこともなく、ひたすら平和に陶醉した人びとは、幸運を当然のこととして享受し、改憲の風潮に流されとともに、無関心派は年々増加する。それらの人びとは、「国際貢献をするため武装して普通の国にならなければ」と説くが、非武装のわが国だからこそ果たした文化面の貢献を誇示したい。

戦禍で不毛となった荒地に農業や水路を開発したり、医療、教育、福祉の面で、住民と一体となつて奉仕するNPOの人びとの業績は現地でも高く評価され、増兵によつて内戦の解決を計る米国の政策に疑問を抱き、反駁の声もあがる。それにもかかわらず改憲派は、「近隣諸国の脅威に対し、独立国家として武力を完備するか、米国の核の傘下にゆだねるより方法がない」と言う。

しかし武装して対峙しても、問題はエスカレートするのみで、解決しない。ミサイルは効率の悪い武器だが、それに核兵器を備えると、破壊力は増大するといわれる。核兵器の廃絶を説く外交能力こそ、必須条件である。私どもは、「攻められたらどうするか」を案ずるより、「攻められないためにどうすればよいか」を考えたい。

ソマリヤ沖の海賊退治にも、列国とともに海上自衛隊が出動しているが、「もぐら叩き」で

海賊が消滅するか、疑問を抱く。その背景に根づく原因の除去、本国の貧困や格差社会の緩和など、社会問題の解決に協力できるのは、平和憲法を遵守するわが国の特権であり、使命でもあるだろう。

沖縄普天間基地の移転に関し、鳩山首相は、「本年五月末までに結着をつける」と明言している。米国は「辺野古の新基地建設」を主張するが、沖縄住民は、県外・国外への移転を切望する。

戦後六五年にわたり米国の基地であり続けた沖縄。日米両国の政権交代をチャンスに、根本的な解決を望むが、まず基地に生活の糧を求めない経済政策を果たした上で、国外への移転を切望したい。

日本の米軍基地は、米国の世界戦略上、重要な位置を占めているが、世界的視野で戦略を考える米国にとっては、グアムでも沖縄でも、大した違いはなからう。鳩山首相は「対等で緊密な日米関係」を主張するが、追従外交でなく、毅然とした国家像を示してほしい。「九条」実施の足枷となるような「安保」を卒業し、独自のカラーで堂々と闊歩する国家の、新しい展開を望んでやまない。

憲法九条は世界の宝

二〇〇八年夏、八五歳の私は、乳がん治療のため二か月入院した。病床日記をかねて「がん

を抱いて九条の会』を、二〇〇九年に出版（風媒社）した。

一切の面会を謝絶し、弧室に蟄居した私は、私なりに世相を客観視することができた。いま日本国民が謳歌している平和な世相は、人類の膨大な犠牲の上に作られた九条のたまものであることが忘れられがちである。しかし海外では高く評価されている。

例えばオハイオ大学名誉教授C・オーバービー氏は、〈九条の会USA〉を結成して、世界各国に戦争の放棄を呼びかけている。わが国にも何度か訪れ、各地で講演しながら、「今日の九条の危機」を熱烈に大衆に訴え、警告を発している。

また伊藤千尋記者の著書『活憲の時代』（シネ・フロント社、二〇〇八年出版）によると、カナリヤ諸島の一隅にある公園は、「ヒロシマ・ナガサキ」と命名され、スペイン語に訳された九条が、碑に刻まれているという。

一方、私どもが学びたい諸国も多い。

コスタリカは、一九四九年に平和憲法を作り、八四年に永世非武装積極的中立を宣言、三〇%を占める軍事費を教育費に廻し、近隣諸国と友好関係を保持している。

またEU（欧州連合体）は、かつて武力紛争の脅威であった独・仏はじめ二七か国が、「二度と戦争はしたくない」という共通の理念のもとに統括機構を作った。二〇〇七年に、創設五十周年を迎えて祝賀した。民族・宗教・言語・社会制度・経済機構などなど、互いに異なる諸国が、多くの矛盾や問題点を抱きながら、「平和」を目指して努力する点を学びたい。三千年来

培われてきた欧州諸国の人びとの文化の結集を見る思いである。

このような諸国の事例をみる時、やはり安保より非軍事的分野における協調を望みたい。すなわち環境エネルギー・地域温暖化・感染症対策・人口問題・経済協定など課題は多い。とくに貧困や格差是正は、テロ対策にも通じる。平和な社会にも、問題は山積みされている。平和構築を目指して日本人の善意や優れた技術が人類に寄与できる体制を望みたい。

すべてのアジアの国ぐにのためにも、日米両国の核廃絶責任は重い

二〇〇九年、オバマ大統領は「核兵器のない世界」を主唱し、鳩山由紀夫首相も同調、「核軍拡を断ち切ることこそ被爆国日本の果たすべき道義的責任である」と明言した。日米の首脳が、共に核廃絶を表明したことに、明るい希望の萌しを覚える。

現在、アジア十三か国が共同体となっているが、仏教を信仰する人びとも多い。慈悲の心は鳩山首相の説く友愛精神にも通じる。アジア共同体推進のための外交能力に期待したい。人類に与えられた叡智を存分に活用して、共存共栄の連合体を創設し、日米関係も新しく進展することを望みたい。

ただ政治を動かすのは大衆のパワーであり、草の根運動の必要性を痛感する。世界の宝である平和憲法の輪を国内外に広めることに、戦中派の私は、使命を感じる。

(2010年1月20日記)

(あいち女性九条の会 会員／名古屋市在住)

何が「本もの」なのか

鳩山政権に思いをよせていたあの時々のことから……

戸田 順子

新しい政権になった。

「もやもやしていたことが吹っ飛ぶのではないか」「刷新されるのではないか」「山積みされた多くの問題を、どんなふうに対処してくれるのか」と静観しつつ、できれば良い方向に向かつてほしいと、期待の一念を抱いていた。見守って行こうと思っていた。

しかし、政治資金など、あらぬ疑念が噴出してきた今、「これはどうしたものか」と、ため息がもれるのは、私ばかりではなからう。

茶の間に瞬時登場する首相の、すばらしい言葉、答弁、演説、パフォーマンス。変革を希む首相の言葉は、確かに美しく、心がなごむ。

でも、現実味がない。宙を舞っているような言葉の羅列。地に足がついていない。

「この人、本当のところ、どれくらい庶民の生活のことがわかってるのであるのか」と、素人である市民の一人として、女性として、ひしひしと身に迫ってくるこの不安とやるせなさ。

日本全国、庶民のほとんどは、実のところ、投じた一票の過剰な期待に、不安とむなしさを

感じ始めているのではなからうか。

——一票を新しい政権に託した責任を自省しているのが、まさに現実の、今の今なのだ。

人の命を守る。世界の命を守る。日本の命を守る。生まれ来る命、育む命を守る。守りたい。確かに言葉として述べられているセリフは、とても心はずむ、心地の良いフレーズばかり。演説の言葉の表現、リズム感の良さに、つい感動して、心がふるえ、称賛したい心境になるのだが、そんな余裕のある気持ちをもて遊ぶ気はない。新しい日本を！政権を！とふりかざした民主党さん。選ばれた政党が、舌の根の乾かぬ間に政治資金の疑惑疑念を持たれているとは！未だくすぶり続け、疑念は晴れず、政治不信の壁は大きくなるばかり。解消に向けて真実を明らかにして、新政権の本物の理念を発揮し、多くの諸問題に取り組んでほしいと願う。

とりわけ、米軍普天間飛行場移設問題は、日米間の微妙な立場に苦慮。一転二転の右往左往の状態から脱しきれなくなり、「私を信じて下さい」と叫んでいる言葉も、軽く、むなしいひびきが残る。「国民は私を信じてくれる」という小沢さんの発言の数々も、信じ難い。

本当にその態度で、政権を貫き通せるものですか。一般庶民はお金で勝負できないけれど、発言が誠の心か否かは、茶の間から、台所から、しかと見つめる眼力は持っていますよ。

しどろもどろの言いわけの羅列は、これから育つて行こうという若者たち、子どもたちへの、良い教えにはなりませんね。

「悪いことをしたら（悪くなければよいが……）ああやって嘘をつけばよいのか（!?）」と、

こぼした若者たちの言葉に、反論も注意の言葉も出てこない。大人たちは、悩み、苦しみ、そして怒っている。「本当にもう……どうなっているの!」と愚痴をこぼしている一般庶民のつぶやきが聞こえていますか。

一般庶民および女性の視点に立つて想うこと

私は名古屋に在住。《イキイキ童謡の会》を発信して二十数年余、現在に至っています。

中高年世代の多くの方がたと、なつかしい歌を共に楽しくうたい、歌の詞(ことば)を通して、生きること、人生を探索することを目標に、すこやかな長寿をめざし励んでおります。

名古屋駅を中心に、東に西に、南へ北へと、足をのばして各会場に辿り着くのですが、途中出会う不幸な人たちの悲しい姿に、心が暗くなることがしばしばあります。住がない、職がない、衣服もボロボロで、駅の片隅にたむろしている彼らの姿は、私の胸に深く突き刺さり、重苦しい痛々しさを覚えます。

知っていますか。「仕事がない、家がないのは、彼らが、ただただ怠慢だからということだけではない」ことを!

とりわけ厳寒の朝、身にまとうはずの衣服もボロボロで、寝袋らしいものをそばに置き、あるいはダンボールを持ってガタガタ震えている不幸な人たちのことを!

彼らは一様に眼を伏せ、駅頭に蠢く群衆の足音を聞いて、なりをひそめているのです。その

姿を私は正視できません。

お金のある方、すばらしいお言葉で、私たちに演説していらっしゃる方がた。本当の苦しさ、真実の姿が何か、おわかりですか。

「命を守る」ということを、絵そらごとでなく、真摯に実行していただけますか。

小さい助け合い、思いやり……。何とか力になれたらと思つても、しょせん、お金のない私たち一般庶民の誠意と努力を、形にするのは、大変なんです。

相手の立場に立つて、日本の小市民の立場に立つて、生きるために戦っている人たちへ、思いやりのある政治をすることはできないのでしょうか。

「貧しい者には政治する力はないのですか。」「金のない庶民は黙っていなさい」の縮図があるとしたら、この日本国は世界に遅れを取り、信頼を失つて行くに違いない。

利権と私欲にまみれた政治屋さんに振り廻されているこの現状を、どう理解したらよいのでしょうか。

現首相の、恵まれた資産と家庭の生い立ちを伺い、日本の一般庶民は羨望より苦笑のほうが大きいかもしれませんね。「そんなにお金があったら、私たちを助けてくれればよいのに……オホホホ……」と、冗談を言い合っているのが現実です。

寒さの中、素足で震えている人たちに、せめて「おにぎりの一つでも」と思う気持ち、私の心の中で複雑に揺れ動いています。

日本の伝統文化「童謡、唱歌」から教えられることとは！

ところで、「歌って、しゃべってイキイキ人生」を提唱している私は、日本の歌の歴史、時代背景を語り、「先人の人たちが、子どもたちのために作って下さった日本の音楽の心を、やさしく伝える講座」を主宰しております。

童謡、唱歌、日本歌曲、叙情歌と、歌のジャンルにこだわることなく、歌の中にある事象に触れ、話し合う機会を持ち、歌を届けております。「歌は世につれ、世は歌につれ」の言葉どおり、時の流れのなか、子どもたちと触れ合った生活での出来事、エピソード、親を思いやるやさしさ、人の心がわかる教えなど、歌の詞（ことば）を通して、せつせつと心にしみ入る感性を分かち合っております。

江戸時代の中期頃から、庶民の中で自然に伝わってきた「わらべうた」。

——徐々に音楽らしきものが誕生。やがて日本に音楽教育が取り入れられ、先人の思いと情熱により「楽曲」が作られてきたのです。

その恩恵をいただき、中高年の皆さんと元気をわかち合いながら、歌い続けられる幸せを、痛感しております。

音楽も、時代の変革の流れに翻弄された、芸術関係の人たちの苦悩、歎きを知ることができません。

人を愛し、国を愛してきた文化の遺産は、歌の中に書き記され、過去の出来事を学ぶことが

でき、同時に現代の政治と比べる手立てとして歴史を理解する道しるべの一端になり、それらの違いを検証するのに役立つております。

中高年世代のみなさん、特に女性たちの多くは、太平洋戦争を乗り越え、貧しさも苦しさも体験し、なおかつ、この時代を生き抜いている強さを持った方が多いのです。

「黙して語らず」ではありません。疑問を持ちながら、「本物は何か!」と自問しつつ、高齢になってゆく自分たちの生き方をしつかり考えております。

政治を司る方たちの真意を信じたくて、今は静観しながら、良い方向になるよう念じている人たちも、いっぱいいます。中高年齢層の人たちの「眼差し」は、確たる輝きと思いを持って、私のトークに呼応して下さっています。

本当は何が大切なんですか。国民は困っています

アメリカのオバマさんも、「チェンジーチェンジー」と変革の旗揚げをし、米国民は歓呼の声、声、に溺れました。そして、まさに日本にも、「国を変えようー新政権の誕生ー」と叫ぶ声に、明るい展望が見え始めてきたはずなのですが……。

この頃は「マニフェスト」の言葉も薄らいで、首相はじめ小沢一郎さんの政治資金の疑惑で、みつともない戦争ごっこをしていますね。口角泡を飛ばし、凄じ議論の応酬。演劇のセリフもどきの言葉の羅列が出てくると思いきや、与党、野党の責め合いの声、声、声。あくび、罵倒、

居直り等々……。

子どもたちに、世間一般の私たちに、「これが政治だ」と言い聞かせ、教えることができますか。真摯に議論をし合い、納得できる礼儀作法を守って、政治を司るのが当然の姿ではありませんか。選挙民に一票を乞う時は、平身低頭、美辞麗句を並べてお願いされましたね。それなのに、あの国会の様子を見聞きして、日本国民は不安といらだち、怒りに燃えて、本当の政治、本物の政府を探し始めています。発足して間もない新政権の船出が、これでよろしいのでしょうか。

お願いです。新しい本物の道を進んでください

新政権誕生の初めから「お金」騒動が民主党から出るなんて……。やっぱりネ」の声。

「叩けば埃の出る体」政党あるいは政治家の隠された体質。「気づかない、知らぬ間にお金が入っていた」とか、「お金のことは任せていたので知らなかった」等々、「わからず存ぜず」の弁。誤解、疑惑のあるような金脈政治は許されません。私たちはしっかりと眼を開け、政治の姿を日々追っております。どうぞ新政権なればこそその底力を発揮して、金脈政治の打破と払拭に努め、これからの大事な「時の問題」の解決、対処に進んで取り組んでください。

日米間の安保条約の問題も、戦後五十年経ち、いろいろ懸案することも多々あります。

「沖縄問題」は「日本国民全体の問題」でもあり、日本の将来の自立を考えることが、あらためて必要と考えます。「アメリカ依存で経済的に成り立って過ごしてきた人たち」と、「軍隊

を持たない日本ゆえの日々の生活の安らぎが大切と思う人」と、県民は二分化され、双方に犠牲を強いられています。沖縄県民の複雑な思いと苦悩の連鎖は計り知れないものが内在していると思います。

基地問題は日本全体の国民の問題。基地があつて、経済的な生活が成り立っている人たち、受益者は七五%と称されていますが、本当に日本のためになる方向、指針を考え、実行していくのが、今の課題なのでは、と思います。原点に立ち返って〈本当の幸せ〉を考えると、何か、新しい局面が開けてくるのではないのでしょうか。

国民は本物の道、本物の政治を……、それでも静かに見守っています。本物の姿を見せてくれる政權を待っています。灰色のトンネルを抜け出て、新しい光を見つけ、私たち日本人に、心のやすらぎと安心を届けて下さい。「老若男女共ども、生きている実感」を早く届けて下さいね。念じております。

(2010年1月31日記)

映像がくるくると変わって、今は……

子ども手当が出た。万円札を数えている四人の子持ちの主婦の姿が妙にこびりついて忘れたい。瞬時の喜びにならぬようにと願う。夫の給料の目減り、ボーナスも無い、あえぎあえぎの生活の中の手当は、嬉しい限りであろう。しかし、目の前の支給に翻弄されないで、現実をしっかりと見据え、適確な情勢判断を忘れてならないと思う。

高校の授業料も無償化。喜びと不安が交叉し、「本当に大丈夫なのか」と思うのは、私だけか。いろいろな難問、難問の解決ならぬ中、少し光が支えられたようだが、それらの現象の幾つかに焦点を合わせると、「やってくれるネ……、いいネエ……、と思う部分もある。ここでしっかりと全体の姿を把握しなければ、思わぬリスク、落とし穴があるかもしれぬと、小市民ゆえに心配も増してくる。

さて、〇〇劇場の役者が変わった。鳩山さんから菅さんへのバトンタッチになったドタバタ劇の幕開け！ 期待を持ち始めている人たちのこともまた、気になる。気になる。

所詮、庶民の空しい期待が、じわじわと現実的なものになり、淋しい了見のように思えてくる。貧しい者の考えであらうか。

ところで時は待たず、計らいどおりに、もう選挙の準備に入っている。またいつの間にかすばらしい演説が街頭を賑わす。選挙時の演説は、どなたもすばらしい！

「力」が入って私たちに降りかかってくる公約の配布。何となくすばらしい名セリフの数かず！

何党であれ、何人であろうとも、本気で一般市民の生活を考えてくださる方がたに、私たちの切なる気持ちを汲んで政治を担っていただきたい。政治屋さんでなく、本物の政治を目ざして、私たちの代表をつとめていただきたいと、心より希望いたします。（2010年6月22日記）

（シルバーライフ・アドバイザー・エイキイキ童謡の会）主宰／名古屋市在住

参議院選挙の前に思うこと

木瀬 慶子

六月十六日、戦後強制抑留者特別措置法（シベリア特措法）が通常国会最終日に成立した。同法には「法律の施行の日において日本の国籍を有するもの」に特別給付金（二五万円、一五〇万円）を支給する」とあるが、同じシベリア抑留者でも、朝鮮人、台湾人が排除されている。旧ソ連の資料によると約一万人の朝鮮人が抑留されおり、植民地出身の人びとを戦争に狩り出した歴史的事実を無視していると思えない。

四月一日から施行されている「高校無償化」では、対象に外国人学校が含まれているにもかかわらず、朝鮮高校への適用だけが見送られている。

文部省は、「教育専門家による第三者機関をつくり、朝鮮学校のカリキュラム調査を行い、その結果で夏に最終決定を行う」としているが、こうした調査自体が異常である。朝鮮学校は、各種学校認可や助成金の手続きの際に、必ずカリキュラムを提出しており、また日本のほぼ全ての大学が朝鮮高級学校卒業生の受験を認めている。この「朝鮮高校」無償化除外は、政府が未だ植民地支配の歴史を反省せず、戦後の朝鮮学校弾圧の延長で行なっているといっても過言ではない。

三月二六日に起きた韓国の哨戒艦「天安」沈没事件について、韓国政府は、米英など四か国も加えた軍民合同調査団をつくり、五月二〇日、「北朝鮮の魚雷による水中爆発によって沈没」

と断定した。さらに国連安全保障理事会に提訴し、北朝鮮の責任を問おうとした。

しかし、そもそもこの事件は、米潜水艦も沈没し、米兵が死亡していることが報道され、米潜水艦との衝突説や座礁説が流れた奇妙な事件だった。李明博政権は、六月二日の地方自治体統一選挙を控え、「北朝鮮の脅威」をおおる目的でメディアをコントロールしたともいわれている。

日本では、この事件を契機に鳩山前首相の主張が変わった。「学べば学ぶほど米海兵隊の役割、抑止力がわかった」と発言し、普天間基地移転先の「最低でも沖縄県外」という公約を捨てて辺野古への移設を決め、日米共同声明までつくったあげく、首相辞任となった。続く菅新内閣は、同じ過ちを繰り返さないのなら日米合意を撤回すべきだが、「日米合意をふまえる」としている。こうしたことをみていると、「北の脅威」がしっかりと政治の中に組み込まれ、それが「高校無償化からの朝鮮学校の排除」や国籍差別に結びついていることを感じる。

悪者をつくり、排外主義をおおって権力政治を維持する構造は、関東大震災下の朝鮮人・中国人虐殺のときの構造と、ちつともかわっていない。

昨年の衆議院選挙で、自民党政治にNOを突きつけた国民の民意の質があたりためて問われている。根本から政治のあり方を考える時だ。アフガニスタンやイラクに行って戦争を行なう米軍が、なぜ抑止力なのか。憲法9条を持つ日本は、日米安保条約を捨てて日米平和友好条約にすることを米国に交渉することで、泥沼の戦争中毒になっている米国のもとから自立でき、アジアの平和もつくることができるのだと思う。平和な社会と差別のない社会をつくることは一体のものだということも、しっかりと心に留めておきたい。(憲法9条——世界へ未来へ連絡会)会員

「普天間」攻防――

連立政権成立から崩壊、そしてこれから 芦澤 礼子

「民主、社民、国民新三党の政策責任者による連立政権樹立に向けた政策協議は、八日、重大な局面を迎える。社民党は、三党の連立合意案に「名護市辺野古への新基地建設を含む在日米軍再編の在り方を見直す」との内容を明文化するよう要求するが、実現の見通しは不透明だ。社民党のマニフェストの記述に比べると表現は弱められており、合意しやすくした配慮がうかがえる。それでも、新基地建設反対を意図する内容の明文化に対する民主党側の抵抗は強い。」

(二〇〇九年九月七日『琉球新報より』)

これは、昨年八月三〇日の衆議院選挙で「政権交代」が実現した一週間後に出た記事である。衆院選に当たって「辺野古への新基地建設反対」を明確に掲げたはずの民主党が、早くも「及び腰」になっているのが、よくわかる。

それから九か月、鳩山政権の「最重要課題」として普天間問題は紆余曲折を重ね、ついには総理交代という事態にまで発展していった。

今となつては記憶も薄れたが、二〇〇九年の流れを整理して、振り返つてみたい。

二〇〇九年の流れ

九月十六日 鳩山内閣発足

九月二五、二六日 北沢防衛相訪沖、仲井真沖縄県知事、島袋名護市長(当時)と初会合

十月二〇、二一日 ゲーツ米国防長官来日。岡田外相・北沢防衛相と会談。オバマ大統領来日まで
に、日本政府として普天間移設の結論を出すよう、普天間移設合意の履行を要求。

十月二四日 岡田外相、「県外移設」に否定的。嘉手納統合案を支持

十月二六日 鳩山総理所信表明演説「米軍再編は地元の思い受け止め、取り組む」

十月二八日 北沢防衛相「辺野古移設は公約内」発言、総理は疑義

十一月七日 嘉手納町民大会に二、五〇〇人「嘉手納統合案反対」決議採択

十一月八日 沖縄県民大会に二一、〇〇〇人「県内移設反対」決議採択

十一月十三日 オバマ大統領初来日。首脳会談で鳩山総理は、普天間「県外・国外」移設を
求めず

十二月三日 社民党福島党首、「普天間移設先、辺野古なら、連立離脱も」を示唆

十二月九日 北沢防衛相グアム視察、移設困難視発言

十二月十五日 基本政策閣僚会議で「移設先について新たに与党三党の実務者で協議する機関

の設置」方針を決定

十二月二十八日 沖縄基地問題検討委員会（委員長・平野博文官房長官）第一回委員会開催。「来年五月までに結論」

この流れを見ていくと、十一月のオバマ大統領来日時における普天間問題決着を念頭に、十月に米側から圧力がかかり、鳩山政権の普天間移設方針が大きく「沖縄県内」に傾いていくのが見てとれる。十月のゲーツ米国防長官来日時点で、岡田外務大臣、北沢防衛大臣は、すでに「普天間基地移設地は沖縄県内以外にない」と腹を固めていたに違いない。

昨年の衆議院選挙で当選した服部良一さん（近畿比例区・社民党）は、「十二月初めに沖縄県内移設でほとんど決まりそうな危機的状況だった」と振り返る。この局面では社民党の「連立離脱示唆」が功を奏し、いったん「県内移設」への動きが押しとどめられたのは事実である。そして「二〇一〇年五月末までに決着」という期間が初めて示されたのは、二〇〇九年も押し詰まったときのことであった。

服部議員は「沖縄基地問題検討委員会」の委員となり、私は今年一月から私設秘書として服部事務所で働くことになった。

「検討委員会」の設置目的は「与党三党で協議し、普天間移設先を探す」ことなので、年明けから「移設先はどこか」ということがマスコミの主要な関心事となり、服部さんも日々マス

コミに迫られるようになった。

私が服部議員の秘書になったそもそものきっかけは、十年前の一九九九年にさかのぼる。

その年に「米軍人軍属による事件被害者を支える会」が関東と関西で設立され、服部さんは、関西の事務局長、私は関東の事務局メンバーとなった。

「支える会」は一九九六年に沖縄で十九歳の息子さんを米兵との交通事故で亡くした海老原大祐さんが設立した「米軍人軍属による事件被害者の会」を支える目的で作られ、防衛庁（現防衛省）との交渉、沖縄防衛施設局（現沖縄防衛局）への申し入れ、韓国の米軍犯罪被害者との交流など、さまざまな局面で、関東と関西の「支える会」は共に行動してきた。

服部さんは関西の市民運動では「ミスター事務局長」と言われるほど行動力と調整力に定評がある人で、二〇〇七年の参議院選挙に担がれて出馬。惜しくも落選したが、当選した山内徳信議員（沖縄）の秘書となった。

服部さんは、二〇〇九年の衆議院選挙に再チャレンジして見事当選。そして「関東の市民運動に人脈があり、沖縄の米軍基地問題に長く取り組んでいる」ということを見込まれたのか、私に秘書の口がかかったのであった。

名護市長選挙の勝利

私の初仕事は、名護市長選挙の応援だった。一月十八日から二四日まで、名護現地に張り付

き、普天間基地の名護市移設に反対する稲嶺進候補の応援に明け暮れた。このとき、〈あごろ〉会員で名護市在住の浦島悦子さんや、〈北限のジュゴンを守る会〉の鈴木雅子さんに、大変お世話になった。浦島さんとともに選挙カーに乗り、鈴木さんが隊長の「自転車隊」で名護の町を走り、そして夜は期日前投票所の市民監視行動に加わった。

この「期日前投票」が何とも異様な光景だった。一月十九日、私は服部良一事務所に以下のようなメールを送り、状況を伝えた。

「島袋陣営(基地容認派)は、『二一日までに期日前投票で一万票集める』と豪語しているとのことですが、豪語したのは島袋候補後援会長の名桜大学理事長(比嘉鉄也氏：一九九七年名護市民投票時の市長)のようです。事実、十八日の期日前投票は一、四一三人、十九日は正確な数字はまだですが、二、〇〇〇人を超えた模様です。(中略)一九日は芦澤も夜八時まで監視行動に参加しましたが、続々と有権者がつめかけており、明らかに土建関係の仕事とひと目でわかる人も多かったです。「お互いに島袋の名前を書いたかどうか、投票用紙をそれとなく見せ合っている」という情報も入ってきています。いずれにせよ、島袋陣営が組織的に投票動員をかけていることは明らかにあります。(後略)」

このようなあからさまな投票誘導について、名護市議会議員十三名(比嘉祐一、仲村善幸、東恩名琢磨さんら)が連名で、十九日午後、「公正な期日前投票が実施されることを求める」という声明を発表して記者会見し、同時に名護市選管委員会に対して「公職選挙法違反と思われる期日前投票の企業動員に係る取り締まりについて申し入れ」をするほどの緊迫した状況だった。

潮目が変わったのは一月二一日くらいだったと思う。黒幕的に動いていた比嘉鉄也氏が、街頭演説に立ったのだ。「島袋陣営は焦っている」と、稲嶺陣営は大いに盛り上がった。期日前投票も、組織的動員と見られる有権者が、目に見えて減っていた。

そして一月二四日投票日。稲嶺進候補一七、九五〇票、島袋吉和候補一六、三六二票。基地に「NO」を突きつける市長の誕生に、辺野古基地建設反対で闘ってきた人びとは沸いた。「もうこれで辺野古に基地は造られない」と、そのとき皆が信じたのだ。

沖縄の民意を「斟酌しない」政府

ところが、名護市長選挙の結果について「沖縄基地問題検討委員会」座長の平野博文官房長官が「斟酌しない」と発言をしたことで、沖縄の怒りは、さらに強まった。二月二四日には沖縄県議会で「米軍普天間飛行場の早期閉鎖・返還と県内移設に反対し、国外・県外移設を求める意見書」が、全会一致で採択された。

検討委員会は八回にわたって会議を重ね、一月のワシントンDC視察(社民党阿部知子議員・服部議員)、二月のグアム視察(検討委員会)、そのほか国内・県外の移設先として名前が挙がった場所の視察などを経て、三月八日に国民新党と社民党(阿部・服部の私案として)の案が、検討委員会に提出された。国民新党の案は「キャンプ・シュワブ陸上案」と「嘉手納統合案」。阿部・服部私案は正式に公表はされていないが、グアム・北マリアナ案を軸に、県外・国内移

設候補地への分散移転が骨子となっている。ただ、この段階ではあくまでも「提案」であり、具体的な場所の検討は、このときから「検討委員会」の手を離れて官邸での協議に移った。

それ以降、「検討委員会」が開かれることはなく、三党の協議を経ずに「ホワイトビーチ案」「勝連沖埋め立て案」「徳之島案」などの案がぞろぞろと報道されはじめた。うるま市議会は、三月十九日に「勝連沖移設反対意見書」を採択。徳之島では四月十八日に二万五千人を集めた大反対集会が行われた。

四月二五日、沖縄県民大会が読谷村運動公園で開催され、九万人以上が参加した。会場に向かう道路は大渋滞し、たどり着けない人も相当数にのぼった。「県内移設」受入派だった仲井真弘多県知事も参加し、県内の自治体すべての首長（代理含む）が参加した。

「私たち沖縄県民は、県民の生命・財産・生活環境を守る立場から、日米両政府が普天間飛行場を早期に閉鎖・返還するとともに、県内移設を断念し、国外・県外に移設されるよう、強く求めるものです」。この大会決議は、沖縄の民意の総意と言えるほどの重みを持つものだった。

しかし、その翌日に国会要請行動のため上京した約百名の沖縄代表団に対して、政府は冷たかった。私は岡田外務大臣に面会する沖縄代表団に同行したが、そのとき高嶺善伸沖縄県議会議長が県民大会決議を岡田大臣に手交して「沖縄県内移設は不可能」と訴えたのに対し、岡田大臣は「普天間基地の移設先を探している。ただ、国外移設という立場には立っていない。海兵隊国外移設では国民の安全は守れない」と、沖縄の民意をにべもなく拒絶したのである。

「海兵隊が沖縄で何をしているか、知っているのか」「あんた自分のところに基地をもって

いけるか」「安保必要と言いながら、沖縄に負担を押し付けてきたじゃないか」「
厳しい言葉が、岡田大臣に投げつけられたが、大臣の表情は硬いまま動かなかった。

普天間が「辺野古」へUターン

四月から五月にかけ、沖縄県外の市民運動の動きも活発だった。

四月六日から九日まで知花昌一さん（読谷村議）と金城実さん（彫刻家）が沖縄からやってきて国会前で座り込み。四月十九日から在京沖縄出身者の下地厚さんか国会前七十二時間ハンスト。四月二五日には全国十か所以上とワシントンDC、ハワイで、沖縄県民大会への連帯行動があった。アメリカの新聞「ワシントンポスト」には県民大会のあとに普天間問題を訴える全面広告（JUCOネットワークが企画、日本とアメリカの市民によるカンパで掲載）が載り、五月十六日の普天間基地包囲行動にあわせて国内紙（朝日新聞・琉球新報・沖縄タイムス）にも、市民のカンパによる全面意見広告が掲載された。

「普天間基地撤去・沖縄県内移設反対」の動きがますます広がり、多様化していく中で、普天間基地移設案決着のめどとされた五月末は着々と近づいてくる。平野官房長官、岡田外務大臣、北沢防衛大臣らが早々と「沖縄県内移設」に舵を切ったなかで、鳩山総理は四月末までは、「県外・国外」にこだわっていた。鳩山総理は四月二四日にワシントン・ポストの「岡田外務大臣が辺野古修正案受け入れを表明した」という報道に対して、「辺野古の海に立てば、埋め

立てられることは自然に對する冒瀆だと大變強く感じる。現行案を受け入れられるという話は、あつてはならない」と述べている。

その総理が変わつた。五月四日、鳩山総理は沖繩を訪れ、仲井真知事と稲嶺名護市長に「県内移設」をお願いした。仲井真知事は「県外移設を望む声が高まつている」と総理に告げ、稲嶺市長は「辺野古に戻ることがあつてはならない」と厳しく対応した。普天間第二小学校での市民との對話集会では、抗議の声が次つぎとあがり、総理に詰め寄ろうとする市民もいた。

五月二三日、総理は再度来沖し、仲井真知事、稲嶺名護市長ら県北部十二自治体首長と会談。おわびを繰り返しながら県内移設受け入れを要請する総理は、またも拒否された。五月八日には徳之島の三町長にも基地受け入れを拒否されていたが、五月二七日に開催した全国知事会でも、基地の全国分散への協力は拒否された。

完全な手詰まり状態の中で迎えた五月二八日朝九時、日米両政府（2プラス2：岡田克也外相、北沢俊美防衛相、クリントン國務長官、ゲーツ国防長官が連名）は、「米軍普天間飛行場移設に関する共同声明」を発表。「代替施設をキャンプ・シュワブ辺野古崎地区及びこれに隣接する水域に設置する」と、そこには明記されていた。また、訓練移転先として徳之島の名前も明記された。「代替施設の位置、配置及び工法に関する専門家による検討を速やかに（いかなる場合でも一〇年八月末日までに）完了させ」という一文も、盛り込まれた。

罷免、離脱、総理交代、そして

この日米共同声明を受け、同日、普天間飛行場移設に関する政府方針の閣議決定が行われた。この文案にも「辺野古」が盛り込まれ、総理は基本政策閣僚委員会で福島瑞穂内閣府特命担当大臣に政府方針の閣議決定案への署名を求めたが、福島大臣は署名を拒否した。このとき、福島大臣は平野官房長官に辞任を勧められたが辞任をせず、結局鳩山総理は福島大臣を罷免した。沖縄の基地問題を社民党の一丁目一番地と位置づけ、「犠牲を払ってきた沖縄の人たちに、これ以上の負担を強いるわけにはいかない」と言う福島大臣に、これ以外の選択肢は、ありえなかった。

五月三〇日、社民党は全国幹事長会議を開き、正式に連立政権離脱を決定した。今回の参議院選挙で改選を迎える近藤正道参議院議員を抱える新潟県連は、「連立」前提で準備を進めてきたゆえに、当然連立離脱に反対だった。結果、近藤議員は無所属での立候補となり、連立離脱は大きな犠牲を払う一面もあったのである。

この時点では、まさか三日後に鳩山総理が辞任してしまうとは思わなかった。

六月二日、民主党の両院議員総会で、鳩山総理は辞意を表明し、小沢一郎幹事長にも辞任を要請した。「半年間、県外移設に努力してきたが、沖縄に負担をお願いせざるを得なくなった」「できるだけ県外にという気持ちを持ち、少しでも移せるよう努力を重ねるのが大事だ」と言う鳩山氏の口調には無念さがにじんでいるようにも感じた。しかし、それならばせめて「辺野古移転は自分には決断できない」と言って辞めればよかったと、私は思う。

二日後の六月四日、あわただしく次の総理が誕生した。

〈市民運動出身が売りの、菅直人新総理は、かつては在沖米海兵隊の国外移転を訴えてきた。しかし、副総理に就任して以降、菅氏の口から普天間飛行場の返還・移設など、基地問題に関する発言は、ほとんど聞かれなくなった。所信表明演説でも「普天間基地移設問題では先月末の日米合意を踏まえ」と表明し、日米合意踏襲の明言は、またも沖繩を落胆させた。しかも留任した岡田外務大臣は、新内閣発足早々に、八月末までに代替施設の工法や具体的な位置を日米間で検討することに関して「沖繩の理解を得なければ前に進まないということではない」と述べ、地元の理解がなくても先に進める考えを明らかにしている。

六月二三日、慰霊の日。菅総理は「平和の礎」を視察したあと沖繩全戦没者追悼式に参列し、沖繩の過重な基地負担に対して「謝罪とお礼」の言葉を述べた。所信表明でも総理は「お礼」を口にしたが、基地を押し付けておいて「お礼」とは……。沖繩戦経験者の皆さんの気持ちは、いかばかりだっただろう。追悼式後に総理と会談した仲井真知事は「県民が納得いく解決策を政府が出さなければ進まない」と、釘をさした。

希望はどこにあるのか

六月二四日から参議院選挙本番に突入。選挙の争点は「消費税」中心となっている。あれほどマスコミが騒いだ普天間問題は、すっかり埋没してしまっただかのようなのだ。もちろん沖繩選挙区では最重要争点のはずだが、自民党公認の島尻安伊子候補を含め候補者全員が、「辺野古移設

「反対」を訴え、争点がはやかされてしまっている。こうしているうちにも八月末の代替施設工法決定に向けて、実務者協議は水面下で進んでいるのだ。

では、普天間基地の辺野古移設を阻む希望は、どこにあるのか。

あまり知られてはいないが、民主党にも「辺野古移設反対」の国会議員は多い。「沖縄等米軍基地問題議員懇談会（代表は川内博史議員（民主党）」は、民主党と社民党の議員が大半を占める議員連盟だが、昨年から講師を招いて頻繁に基地問題の学習会を開いてきた。そして日米共同声明発表前日、懇談会中心メンバーの川内議員と近藤昭一議員（＋服部良一議員）が發起人となって、普天間飛行場について、将来の国外・県外移設を実現する連立与党・政府の基本方針を策定することを求める「5・27普天間問題緊急声明」に一八二人（懇談会メンバー以外を含む）の呼びかけ人・賛同人の名前を連ねて首相官邸に提出したのである。日米共同声明閣議決定を押しとどめるには至らなかったが、民主党内の「辺野古移設反対」議員を発掘した意義は大きく、今後につながる可能性がある。

沖縄では、九月に名護市議会選挙、十一月には沖縄県知事選挙がある。名護では、稲嶺進市長を支持する辺野古移設反対議員を多数派にしようと、活発な動きが始まっている。知事選には、普天間基地撤去・辺野古移設反対を全国を飛び回って訴えてきた、伊波洋一宜野湾市長が立候補を考えていると報道されている。この二つの選挙の結果によっては、日米共同宣言の履行は、事実上阻止できるかもしれないのだ。

希望は、まだある。何よりも自民政権でも、十四年間、辺野古に基地をつくることはでき

なかったのだ。辺野古の海に杭を一本も打たせていないことに、辺野古で座り込みを続けてきた人びとは、誇りと自信を持って、揺るがない。それこそが希望である。

（追記）ちなみに「グアム案」は社民党のオリジナルではなく、「米政府はすでに在沖米海兵隊の大半がグアムへ移設する計画を進めているという事実」に基づくものです。このことについては伊波洋一宜野湾市長が再三述べており、また「沖縄の海兵隊はグアムへ行く」（吉田健正著・高文研刊）に詳しく述べられています。この計画が実行に移されれば、そもそも海兵隊は沖縄にほとんど残らなくなり、新しい基地の建設自体が不要になります。ただ、グアムの先住民族チャモロ族が加重な基地負担を負うことが懸念されます。

また北マリアナのサイパン・テニアン島は経済振興を目的に沖縄海兵隊の島内への移設を希望しており、上院・下院両議会でも移設に賛成する決議を挙げています。照屋寛徳衆議院議員（社民党）が四月に現地を訪れたときは大歓迎を受けました。このサイパン・テニアン訪問をコーディネートし、また「ワシントンポスト」に普天間問題を訴える全面広告を出した際の実務を担ったのが、私の同僚である服部良一事務所の政策秘書・森原秀樹さんです。彼は今回の参議院選挙に東京選挙区から立候補し、現在都内をくまなく走りまわっています。この号が刊行されるときにはもう選挙は終わっているかもしれませんが、三七歳と若く、人権NGOで経験を積んできた彼のような人材が議員になることを期待しています。

（6月25日・記）

（衆議院議員 服部良一 秘書）

〈失望した大衆〉の一人として

中川 清子

鳩山政権から菅政権へ、国民の熱い思いの結果として、昨年の総選挙で生まれた新政権は、参議院選挙に入ろうとしている今、市民の間では決して好評とは言えない。

キャッチフレーズにしていた「後期高齢者医療制度の廃止」は、実現しないまま、消えようとしている。少子高齢化時代への対応としての「子ども手当」は、さっそく実施した市町村もあるが、庶民の反応は冷たい。いち早く実施した市町村の親たちが、「このお金で夏休みに旅行します」「ディズニールランドに行きます」などと嬉々として語る姿がテレビでクロージングアップされたことも、苦しみながら子どもを育てあげた親たちに、にがい印象だけを与えた。

私のような戦中派世代は、「子ども手当」と聞いただけで、戦時下の「産めよ増やせよ」を思い出した。十人以上の子を持つ親が、毎日のように新聞で賞讃されていた風景。私の親などは、「牛や馬ではあるまいし」と、苦い顔をしていた。日中戦争が始まり、多くの遺骨が、毎日のように「英霊」として帰国し、両親は、「弾丸代わりに兵隊を生産しようとしている」と、暗い表情だったことを、昨日のことのように思い出す。

産み、増やされた青年たちは、「つくられた満州国」で、中国の良民の土地を奪い、日中戦争の担い手となって自らは玉碎し、入植者の家族は、命からがらの引揚げの途中で、多くの命

を失った。

この狭い日本で、なぜ〈多子化〉を図ろうとするのか。その疑問点を、ジャーナリズムも、なぜ追求しないのか。

最近になって、「子ども手当」は、保育所の建設に充当させる方法もある」などという報道も目にするようになったが、かつて、日本の「産めよ増やせよ政策」によって、国土の大部分を侵略された中国などは、この国策に内心激怒しているのではないだろうか。

日本のかつての工場労働力は、現在、その大部分が機械に代わった。そして、不況の今、働く職場がない人たちは路頭に迷うばかりでなく、窃盗、殺人までが増えている。どのように考えても「子ども手当」は、納得がいかない。

自民党が、「そのけ、そのけ、お馬が通る」とばかり、大企業に広い道を開き、利潤追求を共にした姿は、庶民の心には、深く刻まれている。この現場をひっくり返して、庶民の上に太陽が降り注ぐことを期待して、大衆は、昨夏、地すべりに民主党に投票したのだ。

「期待が大きかっただけに、失望も大きい庶民の心の傷をいやす政策」を、残念ながら、〈期待された政党〉は、どこも打ち出していない。

どこか一つでもよい。広く庶民の希望をつのり、そのために「あなたは何かをするか」を「問い、それを実行する党があれば、深夜のサッカー中継に熱中する情熱の何倍もの関心をひきつけることだろうと、残念でならない。

といって、もちろん棄権は、市民の権利を自ら放棄すること。

立候補者を見比べ、希望を託せそうな候補者には、どんな意見を具申し、積極的に応援する以外、希望の芽は生まれないように思われる。

*

昨年八月の総選挙の結果を慶んだ、堀場清子さんの詩には深く共感した。あれほどのよろこび、あれほどの期待が、なぜ、穴の空いた風船のように消えたのか。

現存する政党を批判し、棄権するのは、自分自身をおとしめることに、ほかならない。不満は山ほどあるが、私は、不満があるからこそ、多少でも希望を持てる政党に入党することにした。「わずかでも、党費をきちんと納め、気がついたことは上申しよう。」と。

〈傍観者〉〈自己満足的な批判者〉であるかぎり、働く職場の減少も、保育所の不足も、政府の怠慢や不正も、なにひとつ解消しないだけでなく、自分自身も、「前へ」ではなく、いつのまにか後退を続けているだろうと思うので。

あなたのご意見をお待ちしています。

「あぐら」は、あなたのおぐら(広場)です。

長さも、内容も、会員以外の方のご投稿も、自由です。

送り先は、〒160・0022 東京都新宿区新宿1・9・4・1004 あぐら編集部

FAX 03・33554・9014 E-mail: XLV05467@nifty.com



山川菊栄

生誕120年 記念事業

山川菊栄（1890～1980年）は、近代日本におけるフェミニズムや女性労働を語る上で、欠かすことのできない重要な人物です。

生誕120年・没後30年に当たる今年、山川菊栄の「婦人解放」に向けての思想と運動の軌跡をあらためて学び、山川菊栄の現代的意義を再検討するために、記念事業を実施します。

I. 連続学習会

1. 5月23日（日）13:30～16:30
「アジアと日本をつなぐ」
会場：東京・日本教育会館 第3会議室
2. 6月20日（日）13:30～16:30
「欧米のフェミニズムと山川菊栄」
*東海ジェンダー研究所と共催
会場：愛知・名古屋都市センター
3. 7月31日（土）13:30～16:30
「同一価値労働同一賃金について」
会場：東京・女性と仕事の未来館

II. シンポジウム

- 11月3日（水・休）13:00～16:30
「山川菊栄の現代的意義
—いま女性が働くこととフェミニズム—」
会場：東京ウィメンズプラザ・ホール

III. 展示・ビデオ・冊子刊行

※いずれも詳細は裏面参照

主催と問合せ先: **山川菊栄記念会**

tel&fax:0466-26-6135 携帯tel:090-2165-4038

神奈川県藤沢市片瀬360-10 B-307 E-mail:y.kikue@shonanfujisawa.com

「命を大切に新しい政治」に力を注ぐ

福島みずほさん

(ききて 斎藤 千代)

昨年八月の総選挙は、「まさか」と思う大勝利。開票の日の夜は、朝まで興奮して眠れなかった人も多かったと思います。

長い夢が実現してから、半年あまり。現実には政権を負う身として、「苦労も多いと思います。率直なお気持ちをうかがわせてください。

去年の八月三十日、衆議院選挙が終わりました。「命を大切に新しい政治」「生活再建」「新しい政治の品質保証役になる」ということを訴えました。この「命を大切に新しい政治」というフレーズは、私が考えました。鳩山総理が「命を守りたい」と言って、この内閣のキーワードが、「いのち」になったと思うんです。

私は、「いのちを大切に新しい政治」というのは、本当に大切だと思っていました。小泉構造改革で、雇用や社会保障がこわされましたね。医療もそうだし、子育てもそうだし……。



いちばん大きいのは、やはり、平和。戦争の問題が、まさに「いのち」の問題。アフガニスタン攻撃にしても、イラク爆撃にしても、あらゆることは「いのち」の問題なので、「いのちを大切にする政治」を訴えて、選挙をやりました。

この内閣、連立三党の合意の中で、「憲法」というのを新たに設けて、「憲法の理念をきちんと実現していく」ことを柱にしたのは、とてもよかったと思います。

でも、「連立三党で何を軸にするか」という時に、〈憲法〉は入ったけれど、〈平和〉がなかなか入らなかったのですね。

私は、鳩山総理（そのときは代表でしたが）が 声明を発表する前日に、電話をかけて、たくさん言っても、全部はなかなかムリなので、「沖縄県民の負担軽減のために、〈日米地位協定の改定〉と、〈米軍再編や、在日米軍基地のあり方についても、見直しの方向で望む〉ということを入れてほしい。それでまとめますから、よろしくお願いします」と言ったら、鳩山代表は、「わかった」と、力強く言うてくださった。次の日、照屋寛徳さんや辻元清美さんや服部良一さんも頑張ってくれて、思いをこめた文言が入って、連立三党の合意ができました。

私にとっては、連立三党の合意は、「派遣法の抜本

改正」だとか「子ども手当での創設」「待機児童の解消」「地球温暖化防止」「憲法」など、もちろんどれも、みんな大切なだけけれど、沖縄県民の負担軽減の観点から、「米軍再編や在日米軍基地のあり方についても見直しの方向で望む」としたのは、本当によかった、と思っています。

あれは本当によかった。「さすが みずほさん」と、感動しました。

文言が入ったのは、私と鳩山さんにとっては「とても大事」というか、最後の最後の最後に、連立三党の合意ができる、「最後のとどめ」だったんですね。あれが入らなかつたら、なかなか決心がつかなかつたかもしれない。

決心がつかなかつたというのは？

連立三党に入るときに、もし平和のことや、基地の問題や、いろんなことが、きちんと「連立三党合意」に入らなければ、なかなか署名ができないじゃないですか。

あれが入ったことによって、「これなら頑張れる」というか「これなら守られる」ということで連立したということなんですよね。

私たちも、（あれを核とした三党連立）ということで、ほんとにホッとしました。良かった。

〈憲法を活かす政治〉を目指して

〈憲法の理念を活かす〉ということは、「憲法審査会をガンガン動かして、憲法改正案づくりをする」ということですよね。だから、この内閣は、「憲法の理念を、生存権を含めてキチッと大事にしてやっていく内閣」だと思います。

この内閣は、「三党の党首が内閣に入る」ということなので、私自身は、いま、消費者と少子化と男女共同参画と食品安全、それから10分野の共生政策をやっているんですよ。10分野の中では、とりわけ障がい者の施策と青少年施策、自殺対策、定住外国人などを、一所懸命やっています。

私は、もしこの連立政権の中に社民党が入ってなければ、ずいぶん違っただろう、と思っ
ています。派遣法の改正案を、三党のトップが基本政策閣僚委員会に集まって協議するんですね。亀井さんと私と菅さん、場合によっては鳩山さん……。官房長官は常に出席なんですが、「菅さんか鳩山さん」ということになっていて、派遣法の改正案についても、「事前面接解禁」は、削除してほしい」ということで、がんばって、「〈規制緩和〉はダメよ、〈規制強化〉する方向でやりましょう」と主張しました。これは、「社民党がいたからこそ、やれた」と思うんです。もうひとつ、平和のことは大きくて、去年の十二月に、「このままでいくと〈辺野古の沿岸部に海上基地をつくる〉ということを決まっちゃうんじゃないか」という、ものすごい危機感で、十二月三日に、「もしこの内閣が、辺野古の沿岸部に海上基地をつくるという決定をした

場合、社民党としても、私としても、重大な決意をしなければならぬと思います」ということを言ったんです。

さすがー

やはり、これが政権を動かしたというか、今のような政局になったと思います。私は、「去年の十二月中に、当時、共和党政権であったアメリカと、自公政権の日本がつくった〈沖縄の辺野古沿岸部に海上基地をつくるという決定〉をさせなかったのは、大きかった」と、思っているんです。「もし、連立の中に社民党がなければ、あの時、辺野古につくるということになってしまったらと思うから、その点は大きく政治を動かした」と思っているんです。

全くそのとおりですね。しかも、その連立の大臣として「福島さんが声をあげてくださってよかった」と、あのとき、あなたに一票を投じたことを、内心、とてもうれしく思いました。

もちろん、これは、五月末までに問題を解決しなければならなくて、いま、死にものぐるいで頑張っているところです。

沖縄県内、今ある辺野古の沿岸部案と陸上案、今ちよつと出ている、ホワイトビーチの沖に巨大な人工島をつくり、基地をつくる」という案は……、〈沖縄県民の負担軽減〉とは言えない

だろうと思います。

これは、社民党が言っているだけじゃなくて、アメリカが、去年十一月に、〈グアムおよびマリアナ移転に関する環境影響評価ドラフト〉というのを発表したのですが、その中で、アメリカは、「グアムが一番だ」というのを入れているんですね。

これは「環境影響評価」となっているけど、実際は、グアムに対する再編計画なんですね。沖縄から、「海兵隊移転について海兵隊ヘリ部隊だけではなくて地上戦闘部隊だとか補給部隊まで全部グアムに行く」ということなんです。「社民党が言ってる」んじゃないくて、「アメリカ自身が言ってる」んですよ。

マスコミは、それをほとんど伝えていませんね。

そうですね。あまり書いていませんね。

これは、なかなかよく出来ていて、「アメリカの戦略なんだ。軍事戦略として、そう考えている」と明言しています。沖縄は狭いし、人口は密集しているし、キャンプ・シュワブだって「流れ弾丸^{だま}が人家に入った」とか、いろいろある。だから、「グアムとかテナアンでやろう」と。テナアンは、もう手をあげていて、「訓練だけでなく、居住についてもやってくれ」って、言ってるんですよ。テナアンには、三つ滑走路がありますからね。「そこで、ぜひやってほしい」「可能だ」ということを強く言ってる所々なんです。だから「ホワイ・ビーチだとか辺野

古だとか、キャンプ・シュワブだとか、沖縄県内への移設」には、社民党も私も、絶対反対です。

それは沖縄県民の負担軽減にはならない。

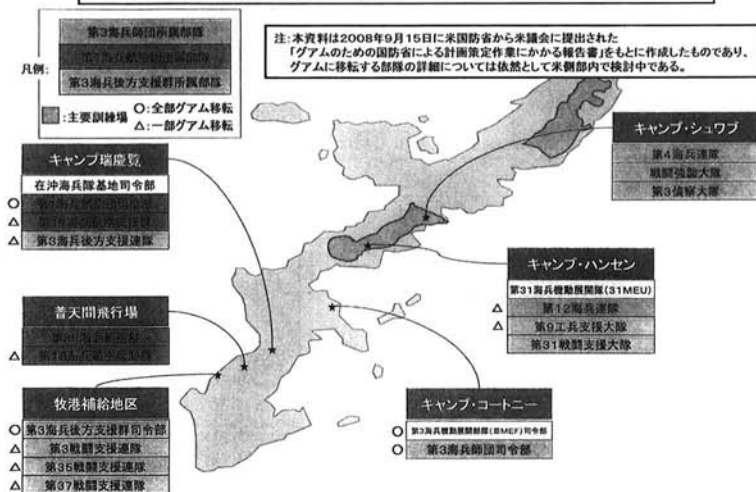
「グアム、テニアン」は、社民党が言ってるんじゃない。アメリカ自身が言ってるんです。

たしかに「アメリカが、日本のどこかに決める」というのであれば、マスコミの態度もわかるのですが、アメリカの戦略は、「グアム、テニアン」なんです。この資料（日米合意実施計画）にも書いてありますね。「グアム、テニアン、日本各地……」と。つまり、ほとんどグアムに行ってしまう……。

ここに書いてある「第三海兵遠征部の望ましい配置」を見ると、実は、海兵隊の定員を減らすんじゃないか……。アメリカの戦略では、「グアムが一番」と考えている。

「そこに集中して沖縄の海兵隊をグアムに移す」と……。

4 在沖米海兵隊の意義・役割(7/7) - 在沖米海兵隊のグアム移転



なんとありがたい！　こちらから言えば、それが一番ありがたいわけですね。

今年は日米安保五〇周年だけれど、長い目で見たときに、世界の政略図って、変わるじゃないですか……と、（私は）思っています。「日米安保五〇周年で、そういう議論もキツチリとしていくべきで、むしろチャンスだ」と、思ってるんですよ。「運動体にとっても、すごくチャンスだ」と……。

とにかく今、社民党は、「グアム、テニアンが一番」。そして「沖縄県内につくることは、沖縄県民の負担軽減にならない。沖縄県民もそれを望んでいない」というところで、「この内閣の中で、とにかく頑張りきろう」と思っているんですよ。

今日も、別件で鳩山総理のところに行ったときに、鳩山総理ともいろいろ話をしたんですが、「閣内でもきちつと話をして、頑張りようと思いますし、沖縄の人、日本国内の平和を思う人たち、それから社民党も、力を合わせて頑張りよう」と思っているわけです。

でも、普天間問題は《社民党問題》では、ないんですよ。「この政権が、平和や、そういうことをどういうふうにかえるのか」という問題のわけですから、「内閣あげて頑張りていきたい」と、思っています。

私は、最近、「政治は、あらゆる可能性に挑戦する技術であり、情熱だ」と思うようになりました。初めから「こんなもんだ」とか「それしかない」とか「そんなこと言ったって、アメリカが呑むわけがないよ」とか言っていたら、現実是不変ならない。

すばらしいお言葉ですね。全くそのとおりですもの。

私は、「アメリカは民主主義の国だ」と、その点では尊敬しているところもあります。だから「日本としてはこうなんだ」というのを、腹を決めて、政府がきちんと交渉することによって、次の展開がある、と思っっているんです。

佐藤首相は、密約とかあつていろいろ問題のある人ですが、彼が、「沖繩返還」ということを一番最初に言ったときは、誰もそんなことが実現できるとは思っていなかったらしいんです。

私は、「政治は、力を合わせることによって、今は実現できてないことを実現できる」と思っっているですね。「そういうことに賭けていきたい」と思っています。

今は、正直言つて一日一日、ものすごく大変ですし、いろんな課題もあるんですが、逆に言う、いろんなやりがいがあるので、「社民党が頑張つて、この内閣が頑張つて、沖繩が頑張つて、みんなが頑張ることによって、違う未来を私たちはつくることができる。そういうやりがいのある時代に生きている。」というふうに思おうと、思っているところなんです。

そういう期待が大きいからこそ、その展開に時間がかかったり、途中で反対が出たりすると、それがすぐ鳩山内閣批判に結びついているんだと思います。正直に言えば（期待はずれ）は、いろいろありますが、私たち自身が信じて一票を投じたことを、ここで、もう一度しっかり思い直して、「どうすれば福島さんたちの後押しをする力になりうるか」を考え、努力していきたい、と思いますね。

みんなが、一步退こうとしたとき、福島さんが普天間のことを、きっちり主張してくださったのは、それだけに、とてもうれしかったんですよ。

えっ、ありがとう……。

なんて言ったらいいのか、私たち安保世代は、どうしても、今も根幹に日米安保があることが忘れられない。福島さんは、安保世代より、ずっとお若いわけだけど。

そうです。一九五五年生まれだから、安保のときは五歳です。（二人、大笑い）

あの時は、みんな、命がけで、朝から晩までたたかった。「安保が定着したら、日本はアメリカの属国になる」と。私は国会に、夫と二人で請願に行ったとき、道端に江田三郎さんが机を出して、「同調する方は署名を」と叫んでいらした。それで、当時の社会党に入党したのです。ほんのわずかも力になりたいと。

でも、党員になってみると、男性である夫は、たいそう期待されたのですが、私は、ふたことめ「女」主婦は……」と言われて、差別される。私は出版労連の単産の副委員長をしていたのですが、「女」というだけで差別する《革新政党》の体質に、だんだん違和感を感じて離党。社会党に向けていたエネルギーで、《あこら》のような《フツー》の人が一緒にやれる場》を、つくってしまったのですが、その当時は、

社会党は政権の対極にあった。今は政権の中核。お話をうかがっていると、みずさんの思いが一つ一つ大きな流れを動かしておられることが感じられ、とても力強く思います。そういうみずさんを、もっと積極的に支えていきたいと、いま、改めて思っているところです。

「政権の中に入った」というのは、大きいことですね。考えていることを、直接、総理に説明できるし、希望が実行に変わっていく。

しかも、「大臣」というポストにもおつきになった。私たちも、大きなパイプが出来た、という希望で、ワクワクしています。

アメリカも共和党から民主党に代わり、日本だって自民党から連立三党になったわけだから、そこは本当に頑張ろうと思ってるんですね。

原子力発電所の問題についても、その推進を、なんとか変えるべきだと思うんです。たとえば、最近、「原子力安全・保安院と経産省を分離すべきではないか」という議論を経産省のなかで始めるということ聞いて、「そういうことは、社民党が主張しなくちゃ」ということで、安全を担保するために分離を主張し、主張したことで、ずいぶん変わってきたんですね。やはり、そのたびに声をあげて頑張っていこう、と思っています。

連立の中で社民党の役割は、〈政治とお金の問題〉にしろ、〈雇用の問題〉にしろ、〈環境問題〉

にしろ、もし社民党の経験やデータがなければ、地球温暖化対策基本法は、もっと原発推進になっただんじやないかと思うんですね。

あと、平和の問題。とりわけ今は基地の問題ですね。そのことについては、やっぱり社民党が存在して、すごく変えていると思っています。

もし私たちが入ってなければ、ずいぶん違うものになっていたと思います。

私はいま大臣で、斎藤さんもずっとやってこられた男女共同参画と少子化と消費者と……、とりわけ自殺対策、青少年施策、それから障害者施策などを一所懸命やっているところです。民法改正も、今国会で実現したいんです。

女の人が結婚で姓が変わる現在の民法も、一日も早く改正してほしいのですが、現実には、女の人でも、「姓が変わることがステイタスだ」と思っている人もおり、いろいろ困難がありでしょうね。

あれは、「結婚して姓が変わる人がいても、もちろんいいし、別姓でもいい」という、選択肢を認めてほしい」ということなので、みんなに別姓を強制するわけではないんですけどね。

現在は、大多数の人が姓を変えますから、ずっと働いてきた人などは、結婚改姓は本当に迷惑ですよ。私など、結婚したとき、課長が出入りの業者に、「今日から担当が変わりまして斎藤さんになりました」などと、ふざけて電話をかけたりにまして……。「なんで女だけが変わるのかなあ」と思っています。

たが。この運動は、一時は盛り上がりかけたのですが、また、元に戻ったみたいですね。

そういうもろもろを含めて、私は福島さんが大臣になられたお祝いに、社民党の党員になったのです。なったからと言ってどれくらいの働きができるかわからないのですが、「支援する」ということを形に示したかった。共産党が強いのは、かわる人は、党員になる。そして赤旗を読み、党費を払うという日常があるからではないかと、長い間、思っていたものですから……。

しかし、せっかく勇気を出して党員になったのに、党費の請求が何か月たっても来ない。いま党費は、いくらなんですか。

党費は月五〇〇円と思いましたが……。

いま、年金生活者でも、思いは持っている方がいますでしょう。そういう方がたは、「年金党員」というかたちで党費を下げて……という仕組みにしています。

それなら、あんまり抵抗がなく入党できますよね。

選挙のたびに、「今度は、社民党に入れて、次は××党」みたいな動きの方も結構いらつしやる。去年の夏の大勝利には、「みんなで提灯行列をしようか」といったくらい感激しましたけれども、選挙速報の数字を見ると、民主党に比べて、社民党の当選者があまりにも少ないので、これは、なんとかしなければなあ、と思ひまして……。

ありがとうございます。

私も、今の「政治とお金」にしても、明確にしなければならぬと思っています。民主党にもしっかりとらわなきゃいけないと……。

ただ、自民党政治に戻ったほうがいいとは、一ミリも思っていないんですよ。ただし、民主党が大きくなって、まさに〈政治の品質保証役になる〉。あるいは、〈ぶれない〉。そういう役割は、しっかり果たさなければならぬと思っています。

私は、わりと単純に、「ヨーロッパのように、社会保障が大事にされる、女の人も男の人も望めば働き続けて、子どもを産み育て、安心して歳がとれるという〈普通の人々が普通に生きられる社会〉を作りたい」と、心から思っています。そのためには、社民党がもっと大きくならなければいけないですね。

それと、この間、〈田英夫さんを偲ぶ会〉の時にも言ったのですが、私の父が一年前に亡くなって、田さんもそうですが、父も特攻隊の生き残りなんです。

私は、もちろん戦後生まれ。一九五五年生まれなんです。八月十五日、父が泣いていたのを覚えています。「もしあの時、戦争が終わらなければ」という気持ちは、ずっと強く持ち続けています。

国家が行なう戦争は、本当に人の人生を大きく変えてしまうし、多くの人の命も奪ってしまうわけでしょう。だから「いのちを大切に政治」というと、いろいろあるけれど、やはり平和でなくちゃ、と思っています。そのためには、自分の力を本当にフルに使いたい。

でも、このテーマは、一人でも多くの人が関心を持って「そうだ」と思ってくれないと、実現できないんですよ。

国民投票法ができたりしたけれど、みんなが「憲法9条がある日本国憲法が大事だ」とか、「武器輸出しないほうがいいよね」とか、これもがんばらないと。政治は、いつだっておかしくなりかねないから、「軍需産業による武器輸出はしない」とか、そういうところを大事にしないといけないと思っていて、「そのためには福島みずほ、社民党をよろしく」と言い続けているわけなんです。

今年は参議院全国比例区で、「福島みずほ」と書いてもらう厳しい選挙もやるので、大臣をやりながら、社民党党首をやりながら、がんばっていかうと思っています。

比例区で誰かがたくさん票を集めれば、比較的無名の人でも当選できますものね。

そうなんです。一人でも多く当選者が出るように頑張つて、一票でも多く集めたい、と思っています。「入れてください」というと公選法違反になるので、「厳しい選挙をやります」です。(笑)

*

離れたところに立って批判をすることは、誰でもできますが、〈当事者〉という立場に立って、より厳しく要求もし、批判も、自らの問題として受けとめていく。「そういう〈当事者〉の地盤が、強く、大きくなったとき、希望も、夢も、ふくらむとともに、その実現の可能性も高まる」と信じています。



お母様の絵に包まれてほほ笑む、みずほさん

〈あこら〉の会員には、地方議員や国会議員は、たくさんいらっしゃいますが、〈大臣〉は、福島さんが初めてです。

遠くに霞んで見えた〈政治〉が、福島さんのご入閣で、グンと身近になりました。今度の普天間の問題でも、福島さんが真つ先に「国外に！」と声をあげてくださった。さすが福島さん！ みんなで、気がついたことは、小さなことでもお伝えし、力を合わせ〈誠実な日本〉を築きましょう。

福島さんの政策調査官の津山直子さんは、以前、〈あこら東海〉でご活躍。誠実で聡明な、すばらしい女性として信望を集めておられた方です。お二人のコンビに期待しています。どうぞお二方とも、何よりもおからだをお大切になさってくださいね。みんな、できるかぎり支援します。いっそうのご活躍をお祈りします。

*

（国会議員の方のお部屋には、ずいぶん何度も

通いましたが、「大臣室」というのは、さすがに格段に広く、りっぱで、感心しました。そのりっぱなお部屋は、花・花・花……で埋められていましたが、奥に、花を描いたりっぱな油絵が掲げられていました。なんと、福島さんのお母上の御作品とのこと。二科会の会員で、個展も何度かお開きになった由。「みずほさんの」発想が柔軟なのは、すばらしい「両親に恵まれたことも一因」……と、うなずきながら、帰途につきました。

（このインタビューの後、原稿の校正までいただいたあとで、福島さんの例の「普天間発言」があり、普天間を、沖縄の人びとの心を、全く無視した鳩山方針が打ち出され、福島さんは閣議で、ただ一人、鳩山さんに造反。せっかくの大臣のポストも剥奪されることになりました。しかし、福島さんの、あの命がけの造反があったからこそ、鳩山政権は崩壊し、普天間への沖縄県民や日本国民の思いも、少しは米國に伝わったのではないかと思います。まさに身を挺して、沖縄を、憲法9条を、守り抜こうとしてくださった福島さんに、改めて深い深い尊敬を抱き、そのご当選を、心からお祈りしております。）

「あなたがお話を聞きたい方」をお知らせください。

お名前(できれば、電話、ご住所も)と、お話を聞きたい理由も付記してお知らせください。お待ちしております。

TEL 03・33354・3941 FAX 03・33354・9014

E-mail : XLV05467@nifty.com

雇用を創り守る!

医療、教育、福祉、自然エネルギーの促進などで、新しい雇用を創ります。自民党政権下では、労働者派遣法などが改悪され、規制緩和とされています。政権交代後、がんばって、労働者派遣法の規制を強化する改正案をつくりました。福島みずほは、1600万人の女性パート労働者の味方です。これからも、パート、契約社員、派遣で働く人たちの労働条件向上のために力を尽くします。もちろん、正社員の人たちの長時間労働の規制もします。

子ども・人権・男女平等

少子化担当大臣として、「子ども・子育てビジョン」をつくりました。子ども手当、保育所、学童クラブなど、子育て環境整備に全力をあげています。補正予算で、「安心子ども基金」200億円を確保。本予算では、保育所支援に377億円増額の4155億円、学童クラブは40億円増額の274億円を確保しました。沖縄県の保育所待機児童解消をはじめ、他の自治体とも協力し、待機児童解消を実現します。いま働いている女性の7割が、妊娠・出産で、仕事を辞めています。女性たちが仕事を辞めなくてもいように子育て支援を充実します。また男女ともに育児・介護休暇をとれるようにします。選択的夫婦別姓などの民法改正を実現し、女性への暴力をなくすため、しっかりと取り組みます。

障がい者

私の父は、1年半前に亡くなりました。晩年は、車いすや介護保険、病院のお世話になり、支えてもらいました。障がい者問題は、実は、みんなの問題です。この社会をもっと変えなきゃ!と思います。「障がい者制度改革推進法」をつくり、私が担当しています。今後は、障がい者差別禁止法や障がい者総合福祉法をつくり、障がい者基本法の改正をめざします。これまでと違い、会議の委員の半数以上が障がい当事者とその家族です。障がい当事者の声が反映された政策がつくれるよう、皆さんと力を合わせていきます。

平和

3党による連立政権成立の際の取り決めには、「沖縄県民の負担軽減のために、在日米軍再編については、見直し方向で臨む」とあります。普天間基地の返還、国外移設するべく、全力でがんばっています。戦中・戦後と大きな負担を強いられたい沖縄の思いをしっかり受け止めて、がんばります。また、日米地協定の見直し、武器輸出三原則の堅持、非核三原則の法制化に取り組み、憲法がいかにされた社会をつくります。

発送作業
その他もろもろの
ボランティア
スタッフ
大募集!!



社会新報

号外
2010年春号

◆カンパの送り先は・・・

口座名称: みずほと一緒に国会へ行こう会
郵便振替口座: 00140-6-34620
みずほ銀行麹町支店: 普通1016663

◆ボランティアのお申し込み、お問い合わせ等は・・・

福島みずほ後援会事務所
〒105-0004 東京都港区新橋3-1-10 石井ビル1F
TEL: 03-5510-8311 FAX: 03-5510-8314
e-mail: mizuhoto@vivid.ocn.ne.jp

発行所: 社会民主党全国連合機関紙宣傳局
週刊(水曜日発行)
〒100-8909 東京都千代田区永田町1-8-1
電話代表03(3580)1171・連絡03(4014)3203
●定価160円 ●12月700円 ●送料160円

医療・介護・年金

自民党政権下で減っていた公的病院を支え、地域の医療を守ります。医師、看護師をはじめとした医療従事者、ソーシャル・ワーカー、介護従事者の労働条件を改善します。特別養老老人ホームの拡充など介護保険施設の必要数確保で介護難民をゼロに。在宅看護の支援強化や低所得高齢者への支援を強化します。また、社民党が提案する「基礎的くらし年金制度」を実現し、基礎年金(全額賦方式)月8万円をすべての人に実現。これに所得比例で払う保険料による上乗せ部分を重なる制度に改革し、「暮らし年金」を実現します。

環境・脱原子力発電・食品安全

自然エネルギー促進法を成立させ、2020年には、自然エネルギーの割合が20%になるように、がんばります。放射性廃棄物や原発などの事故が心配です。社民党は、一貫して脱原発をめざします。食品安全担当大臣として、食べ物の安全を守り、低農薬化や有機農業を支えます。消費者の立場から、食品表示の拡充をはかります。福島みずほは、農業・林業・漁業を応援します。

自殺対策

自殺防止担当大臣として「いのちを守る自殺対策緊急プラン」をつくりました。年度末の3月を「自殺対策強化月間」とし、取り組みました。多くの人がいのちを守るゲートキーパーになれるよう、NGOや自治体とも連携を強めます。もちろん、雇用対策や社会保障などのセーフティネットの強化も重要です。しっかりと対策をすすめていきます。



3月10日 自殺防止担当大臣として、多くの皆さんと自殺防止の取り組みについて障がい者をお呼びしました。



1951年12月7日 第3種郵便物認可



二〇〇九年八月三〇日

堀場 清子

あゝ、よかった

ほんとによかった

腐敗と驕りの自民党政権が
ようやくと壊滅した

どれほど虚仮にされようと

馬鹿のひとつ覚えさながらに

大多数が自民党に投票してきた 半世紀

日本国民はどこまで奴隷根性かと

歯ざしりするしかなかったが



今度ばかりは がらり違った

自民党 三〇〇議席↓一一九議席

民主党 三〇八議席↑一一五議席

期待を上回るとんでんがえした

折も折

台風一一号が接近し

投票日は前触れのどしやぶり

投票率が下がりはないか

わたしの心臓は悲鳴をあげたが

杞憂だった

あつぱれ投票率六九・二八%

二八道府県では七〇%を超えた

投票日前々日に

配達されたマニフェスト『政権交代』も

充実した内容だった

「税金のムダづかい」を「根絶し」



「国の総予算207兆円を全面組み替え」するという
「安心して子育てと教育が出来る政策」をとるとい
「農業を再生し、食料自給率を向上させます」とい
「対等な日米同盟関係をつく」とい
「核兵器廃絶の先頭に立」とい

唯一わたくしが反対なのは

「衆院定数を八〇削減」は良いとして

それを「比例代表定数」に擬している件だ

それでは社民党と共産党が潰れる

この両党は少数意見の提出者として貴重な存在だ
その扼殺は独裁への路に繋がる

不満もある

憲法第九条の堅持や 思いやり予算の撤廃を

明記していない点等々……

しかしマニフェストが理想化するほどに

実現への路は険阻を極める



ともかくにも

この記念すべき日

二〇〇九年八月三〇日

新しい民主政治がスタートした

良識ある国民のみなさまよ

おめでとう

おめでとう

(二〇〇九年八月三一日記)

〔いのちの籠〕第14号より

ち
よ
つ
と
ひ
と
息

★翻訳してみました★

仏陀

原作 レフ・トルストイ

訳 くわはら ちるこ

スッドホダーナ王は、ベナレスから北へ、数日間の行程のところにあるヒマラヤ山脈のふもとに住んで、サーキヤ族を支配していました。王には二人の妻がいました。二人は、血のつながった姉妹でした。二人とも、長い間、子どもがいまませんでした。

年月が過ぎて、姉のマイヤが息子のシッダルタを産みました。王の喜びは、ひとしおでした。シッダルタが十九歳のとき、王は、彼を、いとこの、美しいヤザドガルと結婚させ、新婚夫婦を、森の中の美しい庭園に建てた宮殿に住まわせました。若いシッダルタは、庭や宮殿が大変気に入りました。

愛する息子がいつも幸せに、楽しく暮らせるように願って、スッドホダーナ王はシッダルタの使用人に、若いわが子を悲しくさせるもの、彼を悲しい思いにさせそうなもの、すべてを、隠すよう、厳しく命じました。シッダルタは、自分の宮殿の外へ出なかつたし、宮殿の中は、

壊れたもの、汚れたもの、古いものは、見当たりませんでした。

スッドホダーナの領地では、役に立たなくなつたもの、汚れたもの、古くなつたものを見つけ
ることはありませんでした。スッドホダーナの使用人たちは、あらゆる汚れたものをかたづけ
ただけでなく、庭木から、折れた枝や、枯れ葉をとり、いやなものは何も取り除く努力を
しました。

同様に、彼らは、病氣になつたり年取つた動物を、若々しく元気なものに代えました。

言うまでもなく、使用人すべてが若々しく美しいのでした。ですから、若いシッタルタは、
自分のまわりは健康で、朗らかで、楽しく、生活は豊かで、同じように、彼自身も美しく健康な
二〇歳の体であるのを感じていました。

シッタルタは、一年以上、そのように暮らしていました。彼のまわりすべてが、立派でした。
すばらしいものでした。

シッタルタは退屈になり、他の人びとの生活を見たくなくなりました。

彼は、自分の御者チャナに馬具をつけるよう命じ、早朝の町へ出発しました。

彼はあらゆるものを見ました。街、家、人びとの流れ、動き、さまざまな衣服をまとつた男
たち、女たち、ベンチ、商品、それらはすべて、シッタルタにとって新鮮でした。

彼は楽しさ、喜びで、いっぱいになりました。

ある大きな通りで、彼は、自分の関心を人間の本質的なものに向かわせる不思議な体験をし
ました。

赤い顔をし、口をあけた人間が、時どき息を苦しそうに吐き出し、家の壁のそばに身を縮めて座っていました。大声をだしたり、悲しくうめいていました。

「この男はどうしたのか」シッダルタは、御者に尋ねました。

「彼は病氣です」チャンナは答えました。

「いったい病氣とは なにかね」

「病氣とは、つまり、体がおかしくなつて、苦しくなるのです」

「苦しんでいるのはわかる。しかし、どうして彼はこのようになったのか、また私たちはこのようにならないのか」

「みんな、このようになります」

「私もおそらく、病氣になるのだね」

御者は答えませんでした。シッダルタは、それ以上たずねませんでした。

通りで物乞いの老人がシッダルタの馬に近づいてきました。背の曲がつた、涙っぽい充血した目の、やせて見るからに痛ましい老人が、ゆっくりと足を引きずり、齒のない口で、意味のわからぬことを、むにやむにや言いながら歩いていました

「いったいこれも病人なのか」シッダルタは尋ねました。

「違います。これは老人です」とチャンナは言いました。

「老人とは何か」

「老いるということですよ」

「どうして老いるのか」

「長く生きたからです」

「人はみんな老いるのか」

「みんな老います」

「馬車を家へ帰せ」シッタルタは言いました。

御者は馬を駆り立てましたが、その町の出口で、人びとにさえぎられました。

人びとは担架に、人間に良く似た何かをのせていました。

「これは何か」とシッタルタはたずねました。

「これは死人です。彼らは、焼くために死体を運んでいるのです」と彼らは答えました。

「死人とはどういう意味か」とシッタルタは尋ねました。

「死人とは命が終わったということです」

「どうして終わったのか。命が終わるとは、とんでもないことではないか」

「死とは『終わること』を意味するのです」

シッタルタは馬車から降りて、死人を運んでいる人のほうへ近づきました。むき出しの死人、見開かれた生気のない目、むき出しの歯、硬直した手足の死体が横たわっていました。

「どうしてこうなったのか」シッタルタはたずねました。

「すべてこうなるのです。すべての人は、死ぬのです」

「すべての人は死ぬ……」と、シッダルタは繰り返しながら、頭をたれたまま、家へ帰りま
した。

シッダルタは、一日中、庭の片隅に一人座って、そのことを考え続け、理解しようとしてしました。
すべての人は病み、すべての人は老い、すべての人は死ぬ。人びとはいかに生きるか。

いつでも病気になる。絶え間なく老いる。しかもいつかは、早かれ遅かれ死が確実に訪れる
ことを知りながらも、なんと人間は生きているのだ。

何に喜び、何を行い、いかに生きるかを知っているのか。いかに生きていかなければならないのか。
そして、そのことから解放されるために、それを探しに行かねばならぬ。

そうだ、私はそれを探しに行き、それを探して、人びとに伝えねばならぬ。

シッダルタは決心しました。次の夜、自分の御者を呼び、馬に鞍をつけさせ、門を開けさせ
ました。家から出発する前に、別れを告げに、妻のところへ行きました。妻は眠っていました。
彼は起こしませんでした。けれど、心から別れの挨拶をし、眠っている下男、下女たちを起こ
さないよう、ゆっくりり気をつけながら、自分の宮殿から永久に旅立ちました。

彼は長い間、馬に揺られて旅をしました。最後に馬を自由にしました。

自分の髪を切り、修道士の服に着替え、町や村を歩き、人びとを救う道をさがそうとし始め
ました。

はじめに、バラモンの教えを理解するために、バラモンの賢者のところへ出かけました。しかし、バラモンの教えは、気持ちを変えることや、あらゆる欲望をなくすことによって、自分をきれいにすることであり、彼を満足させることはできませんでした。

彼は、そこから、うつそうとした森へ行き、その森で、自分の体を酷使して人びとを救うという方法をとって、精進と労働の六年間を過ごしました。しかし、この方法も、彼を満足させませんでした。

それほど厳しく自分自身を鍛えたにもかかわらず、救いを見出すことができないまま、彼は、精進や体の酷使をやめ、思索とざんげに救済を求める決心をしました。

そのころから、彼のところへ崇拜者たちが集まるようになりました。

彼は榮譽を得、人びとが彼を誉めそやすようになりました。この賞賛は、彼が見捨てたもの、——父や妻のもとへ帰りたいと思う誘惑として、彼をとらえることとなりました。

しかし、彼は自分の道徳が墮落すると思い、それを恐れて、自分の崇拜者や弟子から逃れて、誰も知らない土地へ去りました。

長いこと、彼はあれこれ悩んでいました。が、あるとき、木の下に座ってそのことについて深く考えていたとき、突然、救いの道が開かれました。まさに救いの道が現れたのです。

すべての物質は、つかのまの命であり、こわれるはずである。

人間は体で考えるとき、苦痛や、病氣や、死にさらされている。それらから救われるには、どうしたらよいのだろうか。

人間の心は、肉体と共にあるとき、心は生きたがつているけれど、かなえられない望みや、死の恐怖をもった心は、悩みを生み出す。それゆえ、肉体の悪い希望は、断ちきらねばならない。教義が、彼の意識の中に、四つの真理として成りたちました。

一つは、〈人びとは苦悩にさらされている〉。

二つは〈苦悩の原因は欲心である〉。

三つは〈欲心はなくすことによって苦悩を減ほすことができる〉。

四つは〈救済は救助の四回の段階によって成りたっている〉。

この四つに気がついたとき、自分の歩む道筋が見えて来ました。

一つの段階は〈心の目覚めである〉。

二つの段階は〈汚れた考えや復しゅうからの解放である〉。

三つの段階は〈疑い、悪意、怒りから自分自身が解放されることである〉。

四つの段階は〈慈悲、——人間に対してだけでなく、すべての生き物への愛である〉。

自分の欲望を押さえつける必要はない。重要なことは、おろかな考えから心の浄化に向かうことである。真理の教育普及、真の解放は、愛だけである。自分の不品行な欲望を愛によって変えた人間が、無学・無作法の鎖を断ち切り、感情や、苦しみや死から解放されるのだ——。

この教義を実行するための規則は、十の戒律としてあらわされました。

1 殺すな。それだけでなく生命を敬いなさい。

2 盗むな。奪うな。それだけでなく、自分の労働によって得たものは、それぞれのこと
に役立てなさい。

3 節制しなさい。清純に生きなさい。

4 うそをつくな。すなわち、必要なことは、恐れなくて、愛情を持って真実を話しなさい。

5 悪いうわさを言ってはならない。それを他の人に繰り返してはならない。

6 誓うな。

7 おしゃべりで時間を無駄にしないで、必要なことを話し、そして黙りなさい。

8 利用するな。ねたむな。そして隣人の幸福を喜びなさい。

9 恨みから心を静めなさい、敵に向かって、憎しみにしがみついては、いけない。

10 不信から自由になり、真理を追究しなさい。

シッダルタ・仏陀は、このような教えを話されました。

仏陀の弟子たちは、はじめ、仏陀から離れましたが、後で再び彼のもとへ加わりました。

仏陀はバラモンから迫害されたにもかかわらず、彼の教えはますます広まりました。

仏陀は、六〇年間にわたって、あちこちと歩いて、自分の教えを布教しました。

彼の死は、ある村から他の村への途中でのことでした。

彼は八〇歳になっていました。彼は弱くなっていました。布教に歩いていました。そのように歩いていたとき、彼は疲れを感じ、立ち止まって、「水が欲しい」とおっしゃいました。

弟子たちが水をさしあげると、少し飲み、休んで、また先へ進みました。しかし、ハラネア―タ川近くに来ると、彼は再び立ち止まり、木の下に座って弟子たちに言いました。

「死が近づいたようです。私がいなくなっても、私があなた方に話したことを、すべて覚えていてください。」

彼の愛弟子アナンダは それを聞いて、自分を抑えることができませんでした。

そこを離れ、泣き始めました。シッタルタはすぐ彼を呼び戻らせ、慰めて言いました。

「アナンダよ、泣くのではない、悲しんではいけない。早かれ遅かれ、私たちは、すべてのものから別れねばならないのだ。本当に、この世に永久になくならないものなどあるだろうか」彼は、ほかの弟子たちに向かって、「私があなた方に教えたように、生きてください」と付け加えました。

「あなた方に巻きついている苦難の網から自由になりなさい。私があなたがたに示した道に沿って、生きてください。いつも覚えていてください。破壊は、すべての物質に起こる、けれど真実は永久に破壊できません。それゆえ、真実の中に自分の救いを探しなさい。」

それが彼の最後の言葉でした。その後で唇を閉じ、生命は静かに去りました。

バラモンⅡ最高位のカースト

仏陀Ⅱサンスクリット語で目覚めた人。ゴータマ・シッダールタⅡ釈迦。

インドには、紀元前六五四年仏滅説がありますが、学問的には確定していない。

仏陀は、サーキヤ族の小国の国王、浄飯王の長子として生まれた。

生後七日目に、母マヤーに死に別れ、一六歳で結婚。

〈聖書を読む会〉に出席し、自分のことを反省しました。信仰とは縁がないようできて、真つ暗な朝、井戸端で顔を洗ったあと、太陽の出るほうに向かつて、祖父が拜んでいる姿を見ながら育ったことを思い出しました。お正月には秋葉神社からお稲荷さん、氏神さま、お寺さん、お墓へと、おまいりしました。そのような子ども時代をすごしました。

神は、いたるところにいる、自然が神。良い教えはすべて神の教え。良い教えとは……。

*

「読書の輪」二月一〇日の後の〈週間の読みもの〉が仏陀でしたので、訳してみました。

お釈迦様の本は子供向けから学問的のものまで、数え切れない多さです。にもかかわらず、改まって読んだこともなく、知識がないものですから、この短編に、適切な言葉がわからず、悪戦苦闘しました。

（千葉県在住 桑原ちえ子）

夫婦げんかの対策（私案）

土屋 隆司

はじめに

夫婦げんかは、犬も食わないという、多種多様で矛盾に満ちたものです。今、けんかして思ったと思うと、すぐ仲直りということもあるでしょう。それほど、道筋のしっかりしたものではない証拠です。

でも、多少なりとも技術（テクニック）は、あると信じます。

方法論

1、夫婦の根底に、「違いを楽しむこと」「お互いを思いやること」を、しっかり持っていること。

2、感情の抑制、すなわち、コントロールが大切であること。

例としてのテクニック

夫1「私に何が言いたいのか、結論を先に言ってくれ。どうしたいのか」

妻2「私の話をひとつも聞いていないではないですか？

よく聞いてほしいのに、何が結論なのよ。

私のシンドサをわかってくれてほしいのよ。」

夫3「僕は疲れているんだ。家くらいは、ゆつくりさせてほしいのだ。

家のことは、君に全部まかせているんだから……。」

妻4「私のこと、ちっともわかってくれないんだわ……。」

右記の例のように、夫婦の会話は、多分に自己本位のなかで、話し合われるため、平行線をたどることになります。

左記のように対応すれば、どうでしょうか？

◎夫1に対しての妻2の会話

妻2「あなた、ほんとうにお疲れさまです。

〈結論を先に〉と言われても、困ってしまうわ。

どうしたらいいか、あなたの意見を聞きたいのよ。」

夫1「僕は何もできないだろう。僕は家に居ないことが多いのだから、めんどうは、もってきてくれるな。」

妻2「あなたは、大黒柱で、私を支えて下さっています。

ほんとうに毎日、生活を支えていただき「ありがとう」です。だから、大事なことを、あなたに聞きたいんです。」

◎夫3にたいしての妻4の対応

妻4「毎日大変でしょう。ほんとうにお疲れさまです。

あなたは、仕事で、ほとんど家に居ないので、こんな機会に、あなたの考え方や方法を聞いて、解決をはかりたいんです。

どうか、ほんの少しでも意見を聞かせて下さいよ。」

以上、参考になるかどうか分かりませんが、夫からの腹の立つ言葉（理解してくれないなら立ち）を、自分の胸の中にいったんおさめ、復唱（心の中で言う）してから、自分の言いたいことを声にして、「どうしましょうか？」という形で聞くようにする。

つらいでしょうが、感情をそのままぶつけるのではなく、とりあえず相手の言葉を、いったん胸に納め、それから、相手の言葉の土俵の上に自分の感情を伝えて、わかってもらうことです。そのため、ひと呼吸のタイミングが大切です。

つまり、〈相手の言葉（腹の立つ言葉）〉の復唱をやめて、怒りを一息のみこんで、〈私の感情〉を相手が気がつくように話しかける……ということです。

心理学的にいうと、〈相手の自己受容からの出発〉ということです。

非常にシンドイですけど、「相手の言葉を自分が誤解した」ということを相手に気づかせて、〈僕のことをわかってくれている〉という安心から、〈君のことも わからないといけないんだ〉と思わせることです。

3、冷却期間をおくこと

「まずいー」と思ったら、いったん身を引いて、メモか何か書いて（メールでも可能）、文章を仲立ちにして理解しあうのも、一つの方法でしょう。

何かの道具立ての仲立ちによって、気持ちを伝える。「わかってもらうこと」が結論なので、「感情のしこりを残すことを、できるだけ少なくすること」が大切ではないか、と思います。

4、男と女の発想の違いを理解すること

男は、職場（会社またはお店）に、長くいます。そのため、自分が現在いる場所で、できるかぎりトラブルを起こさない、という発想が自然に身についているのが現実です。

職場の発想は、「優先順位と効率」が中心です。つまり、目的のための最短距離を目指します。よって、結論が先に、過程は後になります。

一方、女性は、家庭と地域に長く居ます。そこでの発想が自然に身につきます。家庭の発想は、横並びで、〈自分のいる場〉に立った連絡・調整が中心になります。

つまり、「過程（プロセス）→連絡・調整による進行」が先で、その結果による結論」というかたちで、すすみます。

したがって、解決方法が男と女で異なる。このことによる食い違いをハッキリ自覚するなかで、相手の土俵がわかり、理解を早める工夫が考えられると思います。

以上、四点を「夫婦げんか」を大きくしないWin-Winの方法として、考えてみては、いかがでしょうか？

なお、我が家がそのとおりうまくいつてるのではないのですよ。念のため申し添えます。

いま、国民は、自分たちの一票で保革逆転させた歓喜が、「想像していた政党、党首とは違う現実」を示されて、怒るに怒れないストレスの中にいます。

このストレスを、どうすれば解消し、心の底から笑えるか――。

皆様のご意見をうかがいたいものです。

（大阪市在住）

【提案】「あいら」の皆様へ

団塊世代が企業を離れて家庭や地域に戻りつつあります。その時に生じるのが「夫婦げんか」です。発想の違いや立場の違いなどから必ず生じるように思います。その時「あいら」こそ、やさしさと平和の原点から家庭内の戦争(?)を取り除く提案が必要かと思えます。また、夫がぬれ落葉にならないための提言なども、「あいら誌」に掲載してほしいものです。

家庭内においての夫の改造教育にメスを入れることで、現在求められている、「女性の立場を、より確かなものにする」と「夫ができないでしょうか。つまり、老人介護においても、まずは夫の改造教育の指針が、「あいら」から出されると、婦人層の共感も、もっと増えるのではないかと思います。

以上、家庭内のトラブル対策について、ご参考にならないかもしれませんが、思いつきましたことを、夫の立場からお目にかけました。皆様の提言、対策をお知らせください。(土屋隆司)

【編集部から】

このご提案について、あなたのお考えをお待ちしています。

ご提案を深めるもの、ご提案への反論、反発、その他、どんなご意見でも結構です。もちろん、それ以外のご提案も、大歓迎です。

送り先は、〒160・0022 東京都新宿区新宿1・9・4・1004

あいら編集部「提案」係

TEL 03・33354・3941 FAX 03・33354・9014

E-mail : XLV05467@nifty.com

地元合意のない日米合意は決して実現しない 浦島悦子

辺野古回帰は沖縄差別そのもの

昨年九月の政権交代からわずか八か月余、新基地建設計画に翻弄されてきた十四年の苦しみが、やっと終わるという私たちの熱い期待と希望は、五月二八日の「日米共同声明」によって、完膚無きまでに打ち碎かれた。衆議院選で「最低でも県外（移設）」と公約した鳩山首相その人の口から「辺野古回帰」が発表されようとは、八か月前、誰が想像しただろうか……

辺野古移設反対を明言した稲嶺進、名護市長の誕生。自民党県連を含む与野党全会一致の「国外・

県外移設」を求める県議会決議。県知事をはじめ県内全市町村代表が出席し、九万人の県民が参加した、普天間基地の早期閉鎖・返還と国外・県外移設を求める4・25県民大会。豪雨を突いて1万7千人が手をつないだ5・16普天間基地包囲行動。県民はこの間、繰り返して、これ以上ないほどはつきりと「オール沖縄」の強い意思を示してきた。それがことごとく無視され、足蹴にされるのを「沖縄差別」と言わずには、いられない。

五月四日に初来沖した首相は、行く先ざきで林立する「怒」「ウソつき」「詐欺」「拒絶」などのプラカ

ードや横断幕に迎えられ、二三日の再来時には、「沖縄から出て行け!」「帰れ!」コールを浴びせられた。

五月二八日夕刻、名護市役所、中庭で開催された「辺野古合意を認めない緊急市民集会」で実行委員長として挨拶した稲嶺市長は、「今日、私たちは屈辱の日を迎えた」と切り出した。沖縄は何度侮辱され、屈辱を受けねばすむのか……。 「沖縄はまたしても切り捨てられた!」降りしきる雨の中、マイクを握る市長の合羽からしたたり落ちる水滴が、無念の涙に見えた。

日米合意は実現不可能

政府方針への署名を拒否した福島瑞穂党首が閣僚を罷免された社民党は、五月三十日、連立政権を離脱し、鳩山首相は六月二日、引責辞任した。「対等な日米関係」をめざしたはずの鳩山氏が、自国民である沖縄県民の不退転の意思を後ろ盾にして米国とわたり合うのでなく、逆に、米国を笠に着て、沖縄県民と戦い「玉碎」した姿は、あまりにもぶざまだ。

代わって就任した菅直人新首相も辺野古合意を踏襲することを発表したが、メディアの扱いは小さい。首相の首のすげ替えによって普天間基地問題を表舞台から引き下ろし、沖縄以外のメディアは報道しなくなり、水面下で辺野古基地建設のための権謀術数が張りめ

ぐらされることは容易に想像がつく。それはこの十四年間で、私たちが見続けてきた光景だ。

しかしながら、一九九六年の日米(SACO)合意は、容認派の知事や市長の下でさえ、地元住民・県民の反対によって、実現できなかったのだ。今や名護市長の確固とした反対と県民世論の高まりの中で、それはいつそう無理となっている。その無理を押し通すために、ありとあらゆる手段で分断工作、脅しや懐柔が行なわれてくるだろう。しかし、私たちはもう、どんなことがあっても、驚かない。「地元合意のない日米合意は、決して実現しないこと」を確信し、これまでと同様、反対の意思を、しっかりと示し続けるだけだ。

これは「沖縄問題」ではない

鳩山氏の最大の功績は、八か月間の「迷走」によって普天間基地問題を、これまで無関心だった多くの国民に知らしめ、沖縄に基地を押し込めている元凶である日米安保体制や「抑止力」について考え始めさせたことだと思う。首相の交替でこれを幕引きさせてはならない。基地問題は断じて沖縄問題ではなく、日米安保のもとにあるすべての日本国民の問題だ。全国民が「自分自身の問題」として真剣に考えてくださること、それなくして問題の解決はありえないことを切に訴えたい。

(へり基地いらない

二見以北十区の会 共同代表)

中越沖地震 あれから三年

押見 操子

その日は祇園祭の町内めぐり。

祇園祭といえ、柏崎市のメインイベントだ。七月二四日から二六日まで、海上パレード、民謡流したるにわか、花火と続く。祇園祭は、八坂神社が発祥で、八坂神社氏子の該当町内の人びとは、張りきっていた。

彼女

「子ども神輿の付き添いで大変だ」と言いながら、小学校校長だった彼女の夫は、うれしそうに出かけて行った。夫は鶴川町の町内会の副会長。お祭の役員をしている。

市内の目抜き通りで神輿を担ぎ

山車を引いて流すこととは別に、

神輿を引いて町内を巡回する町内周り。家々ではご祝儀を持って家の前に出て声援をおくる。ご祝儀の用意も出来ているし、ああ、あれを持ってこようと、土蔵作りの後ろの家に入ろうとして、立ち止まった。

どどん ぐらぐら

がらがら ぐわーん

「ああ ああ」。

もうもうと土ほこり。

いったいなんだろう。

茶室の部分を残して、家は全壊していた。居間がめちゃくちゃになっていっていることになっているのが見

える。あそこにいたら潰されていた。かすり傷ひとつ無く助かったのは、奇跡に近い。

おとうさんは。

彼

八坂氏は、本町一丁目、本町二丁目、古町、八坂町、鶴川町の五町内。八坂神社に集まり、子ども神輿をだす。子どもと保護者で、四十人ぐらいだった。海を背に、幹線道路を百メートルも行っただろうか。

どん ぐらぐら

キヤー

がらがら

「手をつないで、しゃがむんだ！」
彼は叫んだ。小さい手を掴んだ。
保護者の体を押してしゃがませた。
ちよっと先の家が倒壊した。家は
いったい？ おかあさんは？

「子どもの避難が先だ。」

保護者も、皆、青ざめている。
地震が大きすぎた。町内の避難所
はあぶなくて避難させられない。
しかし、道路にずっとしゃがんで
いるわけにはいかない。細い道を
通っている時でなくて良かった。
細い道だったら、被害は、もっと
大きくなっていただろう。

とりあえず、緑道公園わきの鵜
川に面した三角の空き地に、皆を
誘導した。落ち着かせ、

「もし家がだめなようなら、柏
崎小学校に避難してください。」

そう言って、子ども御輿の一隊
を解散した。

彼は家へと走った。崩れている家。
ブロックが倒れている。

自宅の門柱も倒れていた。

「おかあさん！」

「おとうさん」

いた。助かった。良かった。

彼は言った。

「俺、町内の安否確認をするから、
ここにいてくれ。避難所に行くの
は遅くなる。」

「わかった。おとうさんも氣を
つけて。」

彼女は言った。

避難所へ

鵜川町の町内は、当時は四三世
帯。小さい町内だ。役員が手分け

して動く。それでも安否確認はな
かなかできない。柏崎小学校は早々
に満員になり、鵜川町町内の人び
とは第一中学校に多くいた。元氣
館、柏崎高校、最後に柏崎市市民
プラザで確認ができ、彼が彼女を
迎えに行ったときは、もう、かな
り遅くなっていた。柏崎工業高校
に避難してくださいといわれた。
柏崎工業の体育館は真っ暗だった。
鵜川町の町内の仕事があるからと
第一中学校に避難させてもらった。
長い一日だった。ご祝儀をもつ
たまま亡くなられた方が氏子の中
に三人いたことは、二人とも、ま
だ知らなかった。

中越沖地震

平成十九年七月十六日、月曜日

祝日。午前十時十三分二三秒、マグニチュード6・8、直下型（逆断層型）地震が起こった。

柏崎市のデータでは、死者十四名、けが人一、六六四人。

施設の被害だけで二、二六四億円以上（平成二十一年七月一日現在 柏崎市災害対策本部 新潟県中越沖地震の対応と 復興状況より）。

「世界規模の原子力発電所からあがる煙」というショッキングな映像は、見ることができなかった。あの時を思うと、いまだに平常心が保てない気持ちが続いてくる。被災者という立場に置かれたことが柏崎の町を覆っていた。

あれから、一か月、二か月、三か月がたった。彼女は、民生委員として、暑い夏を自転車で駆け回

っていた。十一月で任期は満了になる。老人の安否確認の作業は、子どもや親類に引き取られたりしている人もいて、簡単ではなかった。彼は、仮設住宅で、いろいろなマスコミから取材を受けた。柏崎駅前の仮設住宅は、取材に便利だったのだ。

一年がたった。感謝の思いがつのる、全国の人から心配してもらった。二年が過ぎた。

二人は、鶴川町に自宅を再建し、ふたたび、地域のために活動を始めた。そして、三年目を迎える。

地震の風化

「復旧、復興に、頑張る。地震の体験を活かそう。ともかく記録しよう。情報発信をしよう。」と、

みんな心がけてきた。

しかし、記憶が、いつしか遠くなる。中越沖地震の風化が懸念され始める。生活に追われる。一人ではできない。「みんなもそうだ」と思ってしまうがちである。

インタビュー

そんな時、彼と彼女の取り組みを紹介したら、すこしでも、役に立つのではないかと、昨年、中越防災士になった夫の勧めで、彼と一緒に、小栗俊郎さんに、インタビューをさせていただいた。

（インタビューは六月七日に小栗さんのお宅で行なわれた。）

——中越沖地震を風化させないための具体策というのはなんでしょうか。

小栗：そうですね。行政も記念行事などしていますね。それを利用することも一案です。例年の、青い短冊にコメントを書くことから、町内単位で大きな旗に寄せ書きを行なうんです。私たちはすぐ手を上げました。町内ばかりではなく、町内から出た人にも書いてもらいたいです。

そして、自助努力でしょうか。

——自主防災会を作られたと聞きましたが。

小栗：作ったというわけじゃないんですが。阪神淡路大震災のころから話は聞こえていたと思います。やはり、平成十六年十月の中越地震がきっかけでしょうか。平成十七年に話が出ました。

青年部、学齢の児童がいる世帯（通

常PTAといっている）、町内会役員が中心メンバーになっていきます。会長は町内会長です。青年部で消防団組織の人が有力メンバーですね。三、四人です。消防署がすぐ近くにあるせいか、便利すぎて、中央地区ではあまり消防団組織が育たなかったように思いますが、それでもがんばってくれています。

昔、私は子供の頃、加納の出身なんです。青年団、消防団の人たちに、ずいぶんお世話になったものです。

なにせ、小さな町内ですから、八坂氏子五町内で考えることにして、平成十八年に話し合いをしました。そのとき安全・安心マップを作ったのです。

——マップ作りのきっかけはなん

ですか。

小栗：平成十八年に、実は私は、柏崎の中央地区コミュニティセンターの活性化策定委員になっており、その時に安心・安全マップ構想を考えたんです。中央地区は三九町内あって、鵜川町の副町内会長だったので、委員になったんです。

マップ作りには、まず南町が、小さい町内だったのですが、すぐ協力してくれました。そのときは市がお金をだしてくれました。

——家の町内も安心・安全・防災マップを配りました。二階の壁に貼ってあります。そうだったんですか。暗い道で子どもが変質者に襲われるとか、そういう用途で作られているのかと思っていました。小栗：そういう使い方も考えて作

りました。

五町内の自主防災会で平成十九年五月には避難訓練もやりました。

そのときの避難所は、あの中越沖地震のときは、みんなだめになってしまいました。公会堂とか、寺とかでしたから。避難所ということを経験していたのだ、と思いましたよ。

そこで、八坂神社（五町内の集会用に使わせてもらっている）の氏子町内の人に何度も集まって、町歩きを行い、安心・安全・防災マップを作りました。平成二二年三月の改訂版です。

写真も、みんな撮り直しました。中越沖地震で大きな被害がでたところですから。このときは赤い羽根共同募金の支援金を元にした助成金を取りました。六万円でした。

この作業を通じて、ご近所の連携が深まったと思っています。

——やはり寺も避難所になつていきますね。

小栗：昔から集まっていたところですから。ラジオ体操とか。広場もあります。なじみのあるところですよ。

——地震の場合の余震、火事など考えると、グラウンドのようなところも、避難所にしてもいいんじゃないですか。

小栗：そうですね。災害にもいろいろありますから、検討してみる価値が、あります。第一避難所、第二避難所、という考え方もあります。第二避難所を、みなとまち海浜公園にするとか。

——自主防災会で、いろいろな防

災用品をそろえたそうですね。

小栗：そうですね。自主防災組織に「防災用品購入補助」という形で、中越沖地震の復興資金からいただきました。

町内会の防災組織で必要なものを買うわけで、一回限りですが、平成十九年度なら二百万円、二十年度なら百万円、平成二二年度なら八十万円の補助がでたんです。でも、もう終わりました。自主防災組織は町内会単位で組織され、町内会長が組織の長をかねるところが多いようです。

しかし、収納の場所が必要でしょう。集会所を持っている町内会のほうが有利なんです。鶴川町は集会所がありません。

——この安心・安全・防災マップ

改訂版ですと、大久保緑道公園の中に防災倉庫があるようですが。

小栗：柏崎市に掛け合って、八年契約で借りました。うちの町内の例をまねて、この公園に、ほかに二つ、町内の防災倉庫があります。倉庫の鍵は四つ作って、それぞれの班に渡してあります。いざというときに鍵がないんじゃ、話になりません。

——AED(自動体外式除細動器)をお買いになったとか。

小栗：まず命を助けなければと思いました。いざというときにすぐ使えるように、うちにおいてあります。夜でも使えるように、「町内会長の家にある」ということは公表してあります。でも、AEDを持っていて町内は、ほかにない

と思います。二四万円なので、なかなか手が出ない。もっと安価なものが出るいいと思っています。使い方の訓練も必要です。だれでも使えるようにする練習は、何回やってもいいです。赤十字の行なっている指導会も有益です。

AEDが柏崎市の何処にあるかというネット上の地図に、ここも載っているそうです。

中越沖地震の経験を活かして、購入する用品を選びました。お年寄りを避難させるために、車椅子でなくてリアカーを買いました。いざとなったら複数の人を乗せられますから。

——町内の皆さんの、防災への意識付けは、どうなさっていますか。小栗：避難訓練でしょうね。工夫

して行わなければならなりません。ほかに「鶴川町ふれあいかるた」を製作中です。文字の部分を、いま、町内の全世帯に配って、校正を求めているところなんです。その中にいくつも防災の観点が入っていますよ。これから絵をつける予定です。

自分たちが住んでいる町ですから、幸せに暮らしていくために、できるだけのことはしたいですね。

積極的な夫の背後を積極的に守る彼女は、私が四十歳で勤め始めた時の上司である。このインタビュウの時も、にこにこして、いっしょにいらした。有能な方である。「夫婦で町内会長をなさっている」と、私は認識している。

「おとうさんのやることを承認

している。」と、妻の喜三子さんは言う。

忘れないうちにやってきた

中越地震は、平成十六年十月である。新潟地震から四十年ぶり。「次の地震も、まあ、四十年とか、三十年とか、来ないだろう。」と、思っていた。

ところが、三年の間隔で、来てしまったのだ。災害は、忘れた頃にやってくるというが、忘れないうちにやってきた。

それでも記憶は風化する。

瀧本浩一山口大学大学院准教授は『地域防災とまちづくり』（イマジン出版）の中で、「災害・防災は幽霊のようなもの」と言っている。普段は見えない。しかし、幽霊

は、取り付くものがある。それを取り除くことができる。その段階で、防災ができるということだ。

できることがある。できることから、やればいいのだ。

中越沖地震、地震体験の風化があやぶまれる。それなら、ともかくできることをやろう。

私はそう思った。

「これが出てきたんですよ。」

小栗俊郎さんがおっしゃった。

高さ二十センチほどの結跏趺坐した石の仏さんだ。お顔もはっきりせず、何の仏様かわからないが、かわいくいらつしやる。ちょこんと玄関脇の石のうえに鎮座しましっている。柏崎の復興に走り回られて、いまお帰りになったのだろう。

（2010年6月11日記）

「各地からの原稿」を お待ちしています

北海道から沖縄まで、南北に長いニッポン。各地の状況も、多種多様です。——あなたのお住まいの土地で、お感じになったことを、どしどし発信してください。

お待ち申し上げております。

〒160-0022

東京都新宿区新宿1-9-4-1004 あごろ編集部

TEL 03-3354-3941 FAX 03-3354-9014

E-mail: XLV 05467@nifty.com

〈連載〉母を語る 7

リブを生きた明治の女書生 4

斎藤 千代

一方、〈ての子〉の結末が、〈入学延期〉になるとは知る由もない私は、〈学校に入る〉Ⅱ〈一年生になる〉ということがどういふことかも知らず、まして、母の心配など、考えたこともなかったのです。

〈入学延期〉を思いついたものの、どこかで我が娘を信じたいと思っていたのでしよう。

母は、ある日、見たこともない小さな箱を買ってきました。

その箱には、蠟紙ろうしが貼つてあり、何度でも字が書けるようになっていました。

道具を前にして、母は、まず、〈イ〉という字を書いて見せました。

「このとおりを書いてもらいなさい」

その字は、見おぼえのある字でした。

二、三年前から、母は『コドモノクニ』という雑誌を買ってくれていました。

私は、その絵本が大好きで、「読んでー 読んでー」と、何度も読んでもらった結果、カタカナも、ひらがなも、いつのまにか覚えていたのです。

母が、蠟紙の上に「イ」という字を書いたとき、私は心の中で「イ」と読んでいました。蠟紙の上に、「イ」と書いた母に、「書いてごらん」と言われたとき、私は、すぐ書くことができました。

私が「真似をしてでも字を書く」などとは夢にも思っていなかった母は、大喜びに喜んで、「ロ」を教え、「ハ」を教え、五十音のすべてを私が覚えたとき、舞でも舞いそうなほど、舞いあがっていました。

「お父様にお知らせしましょう。お手紙を書いてごらん」

言われてすぐ、私は手紙を書きました。

イロハを覚えたこと。字が書けるようになったこと。お母様が大喜びしていること……。

母は、さらに狂喜して、「この手紙を、お父様にお届けしましょう」と、もう、夢中でした。父の役所は、官舎である〈古い家〉の隣で、母は毎日、お昼近くなると父のお弁当をつくって、三重の「お重」に詰めて届けていました。その「お重」の包みに、母の手紙と私の手紙を入れて届けた母の、父の帰りを待ちかねて、そわそわと落ち着かなかった姿は、何十年も前なのに、今でも目の中に残っています。

歳月を重ねて、いま評論家ふうに思い出してみますと、母は、私のことを「見て」いなかったのです。知らなかったのです。

「あわれな低能^{ていねい}子……」と思うだけで胸が痛み、私の言動を正確に見ようとはしていなかつ

たのではないか」、あえて言えば、「(教育者)」としての知識が先行して、真実が見えなかったのではないか」という氣もします。

*

その母が頭を悩ませた新しい問題は、私が数えの八歳になって、小学校に入ったことでした。フミオさん一家はじめ友達が出来ても、私の生来の引っこみ思案はなおったわけではなかったので、小学校に通うようになった初日、隣の席の女の子の利発さと勝ち気さに圧倒された私は、たちまち《学校恐怖症》に陥ってしまったのです。

母がどんなになだめても、すかしても、玄関の脇の大きなガジュマルにしがみついて、一歩も動かない。

その私の指を、一本一本、やさしく木の幹から剥がして、てのひらにそっと握りしめ、学校まで連れていってくれたのは、内地の学校を卒業して父母の許に戻ってきた長姉でした。

美しくやさしい姉が手を引いてくれると、私も学校までたどりつき、教室の後ろに姉が座って見まもってくれるのを確認して、座席に坐るのでした。

しかし、右隣の女の子は、私が先生の質問に手をあげて答えると、とたんに、私の右腕をチクリとつねるのです。マリちゃんというその子は、たいそう賢く、勝ち気で、運動神経も人なみすぐれていただけに、私がその子より一瞬でも早く手をあげると、その瞬間、私の腕を強い力でひねりあげる。

それは生まれて初めての体験でしたので、私は、ただただ怖く、一分でも早く、家に帰りたい

くなるのでした。

その私の様子を母に報告している姉の話から、私は、その子が「シガクさんのお嬢さん」であることを知りました。母は、「視学さんのお嬢さんではねえ……」と、浮かぬ顔をしていました。

今ふうに言えば〈クラスの番長〉の、そのお嬢さんは、アタマが良いだけでなく、「お金持ち」でした。

と言つても、現金を持っていたわけではありません。すてきな模様の千代紙を、何枚も何十枚も、持つていて、それを少しずつぎつて、氣に入つた女の子にあげる、「物持ち」だったのです。ヤボな母に育てられた私は、千代紙というものを見たのも、生まれて初めて。その美しさにほれこんで、学校から帰ると、「千代紙がほしい」「千代紙がほしい」と、母にねだり始めました。

「なぜほしいのか」と問われて、マリちゃんの話をする、母は事情を察したようですが、それは逆効果。「お勉強に使うわけでもない紙を、持たせるわけにはいきません」と、ガードは固い。固い。

いつも〈正義〉を盾にする母を説得することのむずかしさを、子ども心に承知している私は、母にねだることを断念しました。そうかと言って、無防備のまま学校に行つて、またツネられるのは、かなわない。

「学校に行くのはイヤ」と、ガジュマルにしがみついて徹底抗戦。

時間は、どんどん過ぎていきます。

それでも結局、学校まで行くようになったのは、毎朝、姉がつきそって行ってくれたこと。姉が偶然、担任の先生と女学校が同級だったので、先生にお願いして、座席を変えてもらったからでしょう。

それで、私も、一步、踏み出すことができたようです。

*

その後、何日かたつて、門の外の表通り、広い道路を横切つて、キクちゃんの家、つまり、フミオさんの家を訪ねました。それは、家から一步も出たことのなかった私にとっては、（あと思えば）ヨーロッパに行くような大旅行でした。

歩いて十分もかからないところにあったキクちゃんの家は、間口が一間あるかないかの小さな家でしたが、私が生まれて初めて見る二階建てでした。

子ども部屋は、その二階にあり、二階の窓から、私が家の中に入ったのを見とどけたフミオさんは、階段をあがるようにと、階段の上から私を手招きしました。

「階段をあがる」のも、私にとっては生まれて初めての経験でしたが、一段、一段、おずおずしながらも、ようやく階段を登りきろうとしたとき、フミオさんは、手を伸ばして、私に「何か」を渡そうとしました。

その「何か」が手渡されたとき、私はキャーッと叫んで、階段を転げ落ちました。

（続く）

夫のニオイが夫婦愛のバロメーター

(株)ライオンが、07年度末、主婦約1千人を対象にした調査によると、29%もが夫の洗濯物のニオイを「不快」と感じると回答。「互いの会話が少なく夫に魅力を感じない」という妻では61%に達した。

一方、夫婦関係が「円満」な主婦は、そのニオイを「仕事を頑張っている証拠」と、好意的に受け止め、「不快」と答えた人は6%にすぎなかった。

嗅覚の心理学者、筑波大・綾部早穂准教授によると、「ニオイで人が嫌いになるのじゃない。嫌いだからニオイまでイヤになる」という。

五感について多くの著書がある作家の山下柚美さんは、「ふだんから無臭に慣れてしまい、自分と違うニオイを臭いと思えない人が増えた」と指摘する。

調査会社の富士経済によると、トイレを含む室内用芳香・消臭剤の販売額は460億円で、10年間で2割増。衣類用消臭剤を常備する家庭も多く、まさに「ニオイは消せ」という時代という。

この情況に愛知県の大同大は、今春、情報学部に、おいを集めるに学ぶ、「かおりデザイン専攻学科」を新設。同大学の光田恵・同大におい・かおり研究センター長は、「目に見えないにおいだからこそ、正しく取り扱えるプロを育てたい」と言う。

一方、社団法人におい、かおり環境協会は、09年末、専門家チームを結成。東京大学大学院の東原和茂教授(生命科学)や、高砂香料工業の国枝里美専任研究員らが、教育現場への支援や市民フォーラムの開催に乗り出す。一方、調香師たちは、10年早々、「調香技術普及協会」をつくる準備を始めた。

人口自然減7万5千人。09年、戦後最大に。

厚生労働省が、09年1月31日に公表した人口動態の年間推計によると、死亡数から出生数を引いた自然減は7万5千人。過去最大の減少幅になった。

出生数は106万9千人で、前年より2万2千人少ない。一方、死亡数は前年より2千人増。05年に初めて自然減に転じた人口は、06年に一時的に増加したものの、07年からは自然減が継続し、減少幅は年々拡大している。

母と子、においのきずな

北朝鮮の拉致被害者、曾我ひとみさん(50)は、まだ帰国しない母、ミヨシさんの着物や洋服を大切に保管している。「母の汗と機械油のにおい」が沁み込んでいるから。

昼は工場、夜は内職と、働きづめで家計を支え続けた母。夜なべをして、一睡もせずに浴衣を縫って

くれた記憶が忘れられない。

北朝鮮にいた頃、横田めぐみさんからは、繰り返し聞かされた。「お母さんは、いつも香水をつけて、とてもいい匂いがするんだよ」と、ひとみさんは語る。「お母さんが帰ってきたら、母の思うとおりのおしゃれをしてもらい、いい香りのする香水をつけてもらい、一緒に外出したい」と。

ミヨシさんが残した着物や洋服には、汗と機械油のにおいがしみこんでいる。「汗と油にまみれて働いていた母は、世界で一番と思い続けていた。そんな母の娘として生まれたことを、とても幸せに思っています。」と。

東京都内の幼稚園で、昨年末、集まった20組の親子に呼びかけた。「においてママを見つけられるかな」と。なんとほぼ全員が正解。

長崎大医学部、篠原一之教授は、「赤ちゃんが最初に覚えるのが母乳のにおい」と語る。迷うことなくおっぱいを探して当てるのは、においの記憶から。

広島大の利島保名誉教授は、母乳との接触の多い赤

ちゃんは、血流が増えて脳が活性化するという。

抱っこすると赤ちゃんがすっぽり入る「トッポンチーノ」というふとんは、どこへでも持ち運びしやすく、使ううちに母親のにおいが染みこむので、「母親以外の人が抱いても赤ちゃんが安心して眠る」と好評。

嗅覚は、五感の中で大脳と直接つながっており、最も原始的で本能的と言われ、いま各方面で研究がすすめられている。

活躍する女性脚本家たち

マンガや名作を原作とするドラマばかりでは、「ドラマの視聴率が下がる」と、各放送局では危機感を抱いている。

その中で人気が高い女流作家は、「ふたりっ子」「オードリー」などをヒットした、大石 静さん(38)。

「私の台本は、放送局の考査室から大量の付箋と共に返ってくる。「中卒」と書くと、「差別的。高校に行っていないと書け」と言われる。「床屋さん」お

百姓」もダメ。どっちが差別的か。すべてを「角のない言葉」に変えてしまうと、言葉の味わいは消えていく。

タレントのキャスティングでも、怒涛のように押し寄せる条件がある。「人気のあるタレント」を起用すると、芸能事務所から、別のタレントを使うように指示が来る。業界では「行政物件」とよばれるが、私の脚本の師匠、故・宮川 一郎さんは、「どんな玉(配役)でもヒットさせるのが、プロだ」とおっしゃっていた。その教えを守ってきた。「この人であれば書きません」と俳優を指名する脚本家もいるが、私は「何でも受入れ脚本家」と思われている。去年のドラマ「ギネ・産婦人科の女たち」は、あえて王道から外れた作り方をした。主役の藤原紀香さんには、周囲の共感を得られない孤独な産婦人科医を演じてもらった。「彼女の、今までにない魅力が出てくる」と信じて。

視聴者に「考えずに見る習慣」をつけさせたのは、私たち、つくり手。「ながら視聴」に合わせて人物を

単純化させてしまったと、反省する。

「掃除機かけながらでもわかる台本をつくれ」と言われたこともある。でも、人間を立体的に書かないのなら、ドラマをつくる意味はない。恋愛は、自分も相手もえぐり出すが、傷つくことを恐れると、大きな幸せは手に入らない。ドラマもそんな心境まで描きたい、と言う。

『GOOD LUCK』、『十四歳の母』、『サムライ・

ハイスクール』などの作家、井上由美子さんは言う。

「高校生の息子はドラマをあまり見ない。携帯やゲームに熱中する。作品の間口を広げれば、たくさんの人が見てくれる」という幻想があるが、最近のテレビは「視聴者全員がおもしろいと思う作品」を狙いすぎて、表面的な笑いや刹那的な表現を追いかけがちだ。制作費の減少など、状況は悪くなるばかりだが、良い兆しもある。数年前から、俳優の人氣に頼るだけの作品は、当たらなくなり、「作り手がやりたいと思うもの」がやれるようになった。「失敗してもいいから、これをやりたい」という覚悟が、

制作現場には必要。私は「作品のメッセージ性を重視したい。」「いじめ」を扱うのなら、「いじめはいけない」というところまで言い切ることが必要。「視聴者にゆだねてしまうのはダメ」と断言。

「生きづらい時代こそ希望に向かう物語を」を貫くのは中園ミホさん。59年生まれ。代表作は『やまとなでしこ』『ハケンの品格』など。最新作は『コールセンターの恋人』。

十年ほど前、連続ドラマ『やまとなでしこ』のために女の子を取材すると、みんなは、「結婚や仕事で人生を一発逆転できる」と語っていた。でも三年前、連続ドラマ『ハケンの品格』の取材でみんなが語ったのは、「格差」や「先行きの不安」だった。最近は、「どうせ良いことはない」「老後が心配」など、冒険せず、夢も野心もない。でも、私自身は、視聴者を信じたい。現場も良い方向に変わりつつあり、やっとプロデューサーたちが「視聴率のとれる役者がいなくても、派手な仕掛けがなくても、良いドラマはつくれる」と言い始めた。

若者がテレビを見ないのなら、四十代以上のラブストーリーを書く好機。哲学のある女性、弱みやほころびを見せながら、「今」をタフに生きて働く哲学のある女性。「ズッコケルからこそ、人生はおもしろいんです」とキツパリ語る。

高齢化社会を支える「自分たち」という「ご近所力」

相模湾を望む神奈川県小田原市、高台のリゾートホテル。海を一望する絶景に感動しながら一服する鈴木宏康さん(50)と寺口昭吉さん(44)。地元、川崎市宮前区のボランティアグループ〈すずの会〉が企画したバスハイク。同行の76人は、「ご近所さん」ばかり。認知症の母、車いすの母と同行した二人は、共に独身。相談相手もない。男性の介護は、虐待か引きこもりを起こしがちだが、二人を支えているのは〈ご近所力〉の〈すずの会〉。

鈴木さんの父親が認知症で亡くなった数年後、母の徘徊がひどくなり、会社を退職。お金がなく、週

一度のデイ介護サービスと、月一度のショートステイだけが〈ゆとり〉の時間。365日、24時間排泄物をまき散らし、一日中動き廻る母から目が離せず、「毎日が夜勤明け状態」。その鈴木さんを〈すずの会〉のメンバーが訪ねて来たのは2007年夏。メンバーは、「認知症だから寄り添え」とは言わず、ボランティアが開いている近所のミニ集会に誘った。その参加者たちが愚痴を聞いてくれ、各自の自宅での食事会にも招いた。

やがて〈すずの会〉の送迎ボランティアを頼まれ、活動のDVD制作にも参加、「気がつく」と、どつぶりはまっていた」と笑う二人。

利益追求の人間関係とは全く違う〈ご近所の世界〉。「ありがとね」「今日は天気がいいね」と話し合う関係は快い。「一時は絶望していたけど、今はゼロになって、〈自分に何ができるか〉を探している」と笑う二人。

二人を支える〈すずの会〉が活動する野川地区は、東急田園都市線の沿線に三、四十年前誕生したベッドタウン。住民が高齢化しつつある一方、宅地開発

が進み、若い世代も流入している。そのネットワークが〈すずの会〉。近所で誘い合って開く食事は、30か所以上。月2回、みんなで歌い、〈男の料理教室〉メンバーがつくった昼食を共にする〈ミニデイ〉は、いつも80人前後で賑わう。5か所の講演で定期的に開かれる体操会や、〈男性介護者のグループ〉など、核となるメンバー30人が、地域の人の好みに応じて参加できる場を縦横に張りめぐらしている。

活動を通して、「老老介護」、「介護者が倒れた」「元気がない」などの情報が集まる。

地域の高齢者支援の拠点である地域包括支援センターや訪問介護事務所などをまじえて〈ネットワーク会議〉を開き、専門機関と提携して支え合う。おかげで行政や介護サービスともスムーズにつながる。

代表の鈴木恵子さん(62)は、86年の元旦、母がくも膜下出血で倒れ、寝たきりに。翌年は夫の母が脳梗塞から認知症に。徘徊する義母を負って施設や病院探しにも奔走した。

その恵子さんを支えたのが、地域の保健師や、看

護師。そして息子のPTA仲間。「みててあげるから父母会に行つて」。緊急時には、みんなで支えた。

介護を終えた95年、苦楽を共にしたPTAの五人で立ち上げたのが〈すずの会〉。「困ったら、いつでもすずを鳴らしてください」と。

発足当時、寝たきりや認知症のお年寄りとは、地域で、120人程度だったが、今は千人に。〈ミニデイ〉など定例会のあとは反省会があり、気になる人について話し合う。「電話して出なかつたら、すぐ駆けつける体制をつくろう」などなど。

合言葉は「やってみましようよ」。「車いすの女性に、おしゃれなマントをつくる」「末期がん患者の手を握る」など、「できること」から始める。若年認知症の妻の手を引いてきた男性のために〈ミニデイ〉を始めた。その男性も、今はボランティアとして〈支える側〉に回っている。60、70歳代が多いボランティアも、「いつ倒れてもお互いさま」の関係。その人なりにその人らしく生きられる支え合いの網は、きめ細やかに広がっていく。

「あごろ」は、人と人が会うつひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごろ」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

「BOC」の登録もどうぞ……

一九六〇年に生まれた「BOCバンク・オブ・クリエイティビティ」は、「創造力の銀行」。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな「創造力」でも歓迎！ ただし、半年以上「あごろ」会員の方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿一〇九四 中公ビル
電話 03-3354-3941 (代表) FAX 03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com または boc@mb.infoweb.ne.jp
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/asora1/>

あごろ 324号 政権交代、そして今。

- 編集 あごろ新宿 ●発行 2010年6月30日 ●印刷 藤田印刷(株)
 - 発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル10F
 - TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com
 - 定価 本体1,000円＋税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごろ編集部
-



9784893061812



1920036010004

ISBN978-4-89306-181-2

C0036 ¥1000E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,000円+税

平和と平等を追求する
『あごら』近刊シリーズ

〈女の壁〉にチャレンジした女たちⅡ

六〇代は女ざかり

世界各国の女男平等は？

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —

女性専門職集団

BOC

—————

各種プランニング

各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他

—————

男女共同参画の

BOCシニアも

スタートしました。

ベテランの知恵と経験を

お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354-3941 FAX3354-9014

E-mail XLV05467@nifty.com

サイレントマイノリティのBOC出版